Educational support and development research for LAOS

ラオス教育支援と開発研究

～2019年度ラオス研修報告書～

展示会・第3回「東南アジアのすゝめ」開催（2019年11月）

2019年度「学生研究発表大会」で学長賞受賞（2020年1月）

ラオス研修スタート、ワッタイ国際空港にて（2020年3月）

ゼミ先輩・ナムさんとの交流、凱旋門・パトゥーサイにて

ナコンファン小・中学校の生徒に授業を実施

ゼミ生（高校時代、全国大会出場）によるサッカー教室開催

2021 年 3 月発行

桃山学院大学経済学部・内山ゼミ

MOMOYAMA GAKUIN UNIVERSITY / UCHIYAMA SEMINAR

○ゼミについて

「ゼミ」（ゼミナールの略称）とは、大学独自の授業形態で、1人の教員に対し少人数の学生が集い、特定の専門分野について深く学びます。3・4年次のゼミ（本学経済学部の場合、「演習Ⅲ」・「演習Ⅳ」）では、学生各々が自身の興味・関心や問題意識に沿って、2年間かけて研究や調査、論文の作成に打ち込みます。週に1度の授業では、担当者があるテーマで発表し、これを皆で議論するといった機会が設けられます（一例）。この他、授業の枠組みを越え、大学祭でのイベント開催や研究発表大会への出場、学外への調査、夏期勉強合宿、スポーツ交流会など、様々な活動が各ゼミで展開されます。内山ゼミは本学経済学部のゼミで、「東南アジア経済研究」を軸に活動します。

＊各大学・各学部・各教員によって、「ゼミ」の定義・解釈や運営の仕方は多少異なります。

はじめに

「東南アジア」と聞くと、皆さんはどのようなことを思い浮かべますか。黄金きらめく仏教寺院や特徴的なドームを持つイスラム教モスク、あるいはエメラルドのビーチ、スパイスの効いた料理、激しいスコール、道路を覆い尽くすほどのバイク群など、様々でしょう。「東南アジア」は多様な社会・文化が存在し、各国がそれぞれに異彩を放っています。ラオス人民民主共和国（以下、ラオス）は、米国雑誌『ニューヨーク・タイムズ』で「世界で１番行きたい国」（2008年）、英国雑誌『ワンダーラスト』では満足度の高い観光地・都市別部門で、「古都・ルアンパバーンが第１位」（2015年）に選出され、注目を浴びたことがあります（いずれも読者投票）。その魅力を言葉で表現するのは難しいのですが、「優しさと微笑みあふれる国」（ラオス情報文化観光省）と紹介されるように、一度訪れるとその素朴さやのどかさ、人々の優しさに惹かれます。皆さんも訪問すれば、きっとその意味が理解できるでしょう。

経済面に目を移すと、「東南アジア」については「日本企業の直接投資先」、「成長著しい地域」という印象をお持ちかと思います。1985年9月の「プラザ合意」により円高局面が生まれて以降、日本企業はタイやマレーシア、インドネシアなど、東南アジア諸国への進出を加速させました。これら諸国は自国の開発戦略も相まって、大きく工業化を成し遂げ、その成長ぶりは1990年代に、日本やアジアNIES（ニーズ）（韓国、台湾、香港、シンガポール）とともに、「東アジアの奇跡」（世界銀行）と称賛されるまでになりました。今日も、日本企業にとってビジネス展開の戦略上重要な地域であり、ASEAN（アセアン）（東南アジア諸国連合）やRCEP（アールセップ）（東南アジア地域包括的経済連携）に見られる経済統合への取り組みは、巨大な市場、経済圏の可能性が期待されています。一方で、第2次世界大戦後も内戦や内乱が絶えず開発が遅れ、現在も国連によって、ＬＤＣ（エルディーシー）（後発開発途上国）に位置づけられる国があります。ラオスはその一つです。同国は人口規模が小さく（約701万人）、国土の大部分が山岳地帯・高原、内陸国で港を有しないなど、開発に不利な条件が多いと考えられています。経済は鉱業と水力発電による電力が牽引しており、有望な産業が十分に育っていません。さらに、ラオス内戦（1953年~1975年）時に米軍（アメリカ軍）により投下されたクラスター爆弾の不発弾は今も約8000万個残存し、その撤去には今後200年以上かかるとも言われています。しかし、このラオスも近年は外資導入を積極的に進め、工業化を図るなど、LDCからの脱却、ASEAN先発国へのキャッチアップを目指そうとしています。開発にとって悩ましい問題はたくさんありますが、この国をいかに発展させていくか、ラオス政府の政策や日本をはじめとする先進国の開発協力が重要となります。内山ゼミの開発研究の主眼はこの点にあります。

当ゼミでは「アジア経済論」、「開発経済論」を軸に、「東南アジア諸国の経済」を学びます。「東南アジア一国のエキスパート（専門家）になろう」をスローガンとして掲げており、ゼミ生各々が担当国を持ち、専門性を高められるように指導しています。私が本学に着任したのは2015年9月で、2年間の本格的なゼミを初めて担当したのは、翌2016年度のことです。手探りでのゼミ運営から始まりましたが、「ＢＳＰ（ビーエスピー）ベトナム」（国際センター主催）や「経済学部ＡＢＣＰ（エービーシービー）マレーシア及びタイ）」といった海外研修の引率で関わった学生など、東南アジア諸国への関心の強い学生が多数所属し、ゼミ活動は徐々に活発になります。2017年7月に、竹内克くん（2018年度卒・ゼミ2期生）が「『桃山祭』（大学祭）でゼミの展示会を開催したいです」と相談に来たことから、東南アジア諸国の魅力を伝える展示会「東南アジアのすゝめ」

が始まりました。さらに、同期にラオス人留学生のパチャンペン・ティッパポーンさん（Ms. Phachanpheng Thipphaphone：通称・ナムさん）が所属していた縁で、ラオス教育支援のための募金を行うようになります。これらの活動が後輩ゼミ生に引き継がれ、「ラオス研修」（2020年3月）へと結びつきます。

ゼミを代表して「ラオス研修」に参加した伊藤和輝くん、猪俣遼一くん、高井寿彦くん、武田望さん、小坪唯人くんの5名は普段のゼミから、「東南アジアのすゝめ」開催、ラオス教育支援活動、ラオス開発研究まで非常に熱心に取り組んできました。彼ら一人ひとりが自分自身のなすべき役割を認識し、その特性を活かしながら活動していたように思います。彼らと過ごした時間は、正課で割り当てられた授業時間よりも、課外活動の時間のほうが長かったようにさえ思います。ラオス教育支援、開発研究に没頭する彼らの姿を見ると、教員冥利に尽きました。勉学に一生懸命励み、ラオスの子どもたちに笑顔をもたらした彼らに賛辞を送るとともに、一連の活動をここにまとめます。

この報告書は主に、経済学部への進学を考えている高校生の皆さんやアジア経済に関心のある本学学生を対象としています。「アジア経済論」、「開発経済論」でのゼミを通じての学びがどのようなものであるか、その楽しさを感じていただけましたら幸いです。また、広く一般の方々にご覧いただき、ゼミ活動と同時に、ラオスという国の事情を知っていただく機会になればと存じます。

2020年10月

経済学部講師　内山 怜和

〔写真〕内山ゼミ「ラオス研修」参加者、ワッタイ国際空港にて（2020年3月2日）

＊左から高井、猪俣、伊藤、武田、小坪、内山

目次

はじめに

１．ラオス研修の趣旨

【１】研修参加者----------4
【２】研修先ラオスについて----------6
【３】研修の主な活動と目的----------8
【４】一連の活動を写真で振り返る---------- 10

２．ラオス教育支援活動

【１】展示会「東南アジアのすゝめ」---------- 16
【２】募金活動と支援物資の贈呈---------- 18
【３】ナコンファン 小・中学校との交流---------- 21

３．ラオス開発研究の検証

【１】「学生研究発表大会」での報告要旨---------- 26
【２】JICAラオス事務所---------- 29
【３】JETROビエンチャン事務所---------- 32
【４】ドンカムサン教員養成校と附属小学校---------- 35
【５】ラオス農林省農業局---------- 37

＊３.【２】～【５】は訪問時のヒアリング内容

４．桃大・国際体験記

【１】海外研修への挑戦とラオス開発研究（伊藤 和輝）--------- 39
【２】ナコンファン中学生との交流と開発研究（猪俣 遼一）----- 42
【３】全力を注いだ内山ゼミでの活動（高井 寿彦）---------- 44
【４】桃山祭実行委員会と内山ゼミ（武田　望）---------- 46
【５】サッカー一筋から東南アジア専攻へ（小坪 唯人）--------- 49

むすびにかえて

付録　2019年度「学生研究発表大会」本選での発表資料（2020年1月11日）

1．ラオス研修の趣旨

【1】研修参加者

（1）参加学生

当ゼミの3期生（2019年度4年次生）から4名、4期生（同3年次生）から1名の計5名です。

	氏名 （出身校）	特徴（内山評）	海外研修参加 海外渡航経験
3期生	伊藤（いとう） 和輝（かずき） （堺西高）	3期生ゼミ長。専攻はカンボジア。中・高ではバスケ部。ゼミの頼もしいリーダーであり、学業成績は極めて優秀。さらに、大学の学費は自身のアルバイトですべて賄った努力家。「学生研究発表大会」では、彼の論理的思考力が発揮された。3年次の「BSP中国・香港」では、メンター(1年次生指導役)としても活躍した。	＜海外研修＞ 「BSP中国・香港」 「経済学部ABCP・マレーシア」
	猪俣（いのまた） 遼一（りょういち） （堺西高）	専攻はラオス。中・高ではテニス部。趣味はカラオケ。ナコンファン中学校（ラオス）で実施した音楽教室は、彼の独壇場であった。前年のラオス教育支援活動では、小・中学校への手紙の執筆を担当。3期生ゼミのムードメーカーであり、爽やかな笑顔と失敗を恐れないチャレンジ精神が持ち味。	「ラオス研修」が初の海外渡航
	高井（たかい） 寿彦（としひこ） （藤井寺高）	3期生副ゼミ長。専攻はインドネシア。中・高では剣道部。第2回「東南アジアのすゝめ」（2018年度）では、クイズ大会の司会・解説者として活躍。子どもたちの人気者となった。その他、親睦会・イベント開催など、ゼミの一致団結に大きく貢献。また、後輩指導にも非常に熱心であった。	＜個人旅行＞ 台湾
	武田（たけだ） 望（のぞみ） （河南高）	専攻はカンボジア。中学ではソフトボール部と美術部、高校では書道部、趣味はピアノという文武芸に優れた学生。1・2年次は桃山祭実行委員会で活動した。3年次の第2回「東南アジアのすゝめ」ではゼミ責任者として活躍。しっかり者で、「ラオス研修」では仲間の体調を気遣う優しい面が随所に見られた。	＜海外研修＞ 「BSP中国・香港」 ＜個人旅行＞ ベトナム・カンボジア・タイ
4期生	小坪（こつぼ） 唯人（ゆいと） （鹿児島城西高）	4期生ゼミ長。専攻はラオス。大分県出身。高校時代はサッカー部で全国大会に出場。左サイドバックとしてプレー。ナコンファン小・中学校でのサッカー教室では、その経験と技術が存分に発揮された。またコミュニケーション力の高さは抜群で、フィールドに限らず、あらゆる場面で状況判断に優れる。	＜海外研修＞ 「BSPベトナム」 「経済学部ABCP・タイ」

（2）引率教員　内山（うちやま） 怜和（れお）（経済学部講師）

専　　門：「アジア経済論（ASEAN経済論）」、「開発経済論」
担当した海外研修：「経済学部ABCP」（2015年度～2018年度）、
「BSPベトナム」（2016年度～2018年度）

◯株式会社フロムページ主催「夢ナビ」（高校生対象の模擬講義イベント）出演：2017年6月17日
・私達は今後ASEAN諸国とどう関わるか（夢ナビTALK）
https://www.youtube.com/watch?v=pWxk3K2Koas&t=4s
・ASEAN諸国の成長と日本の関わり（夢ナビライブ）
https://yumenavi.info/lecture.aspx?GNKCD=g008464&ProId=WNF001&SerKbn=e&SearchMod=10&Page=1

（3）内山ゼミについて

○スローガン：東南アジア一国のエキスパートになろう
○学 修 分 野：「アジア経済論（ASEAN経済論）」、「開発経済論」
○学修テーマ
＜専門国＞
・各国の近現代史や近年の経済概況、投資環境、経済発展戦略
・日本との関係性：日系企業の進出動向、日本政府の経済援助
＜その他＞
・アジア経済全般、ASEAN（東南アジア諸国連合）の地域協力、経済統合

○2期生（2017年度「演習Ⅲ」・2018年度「演習Ⅳ」、20名所属）

○3期生（2018年度「演習Ⅲ」・2019年度「演習Ⅳ」、22名所属）

○4期生（2019年度「演習Ⅲ」・2020年度「演習Ⅳ」、17名所属）

各学年、皆が協力してゼミ展示会「東南アジアのすゝめ」を開催、同時にラオス教育支援活動を展開しました。研修参加者5名（左記）は皆の想いをのせて、ラオスを訪問します。

ラオス国旗

【2】研修先ラオスについて

（1）位置

〔資料〕外務省ホームページから引用、追記

（2）基礎データ

正式名称	ラオス人民民主共和国	成立	1975年12月2日
面積	23万6800㎢ （約8割が山岳地帯、内陸国）	人口	701万人（2018年）
首都	ビエンチャン（人口：約90.7万人）	ASEAN加盟	1997年7月
民族	ラオ族はじめ計50民族	言語	ラオス語（公用語）
政治体制	人民民主共和制 （人民革命党による一党支配）	議会制度	1院制国民議会（149議席） 選挙、党大会は5年毎
国家主席	ブンニャン・ヴォーラチット氏	首相	トンルン・シースリット氏
名目GDP （国内総生産）	181.3億米ドル （2018年、IMF）	1人当たり 名目GDP	2567米ドル （2018年、IMF）
名目GDP 産業別構成比	152兆4140億キープ（2018年、Laos Statistics Bureau） 農林水産業（15.7%）、製造業（14.7%）、電力（10.9%）、鉱業（6.0%）、卸売・小売（12.3%）、金融（9.8%）、宿泊・飲食（7.7%）、不動産（5.6%）、運輸（1.3%）、その他（16.0%）		
輸出額・ 輸出品目	5968米ドル（2019年、JETRO）：鉱物・電力（49.5%）、木材・木製品（9.1%）、農畜産物・食品（8.0%）、縫製品（6.0%）、その他（27.4%）		
輸入額・ 輸入品目	6747米ドル（2019年、JETRO）：機械・部品（21.9%）、化石燃料・電力（13.2%）、車両・および部品（8.9%）、農畜産物・食品（15.9%）、鉄鋼（10.5%）、その他（29.6%）		
経済的 特徴	銅・金などの鉱物資源、水力発電による電力の輸出に支えられる。主な貿易相手国はタイ、中国、ベトナムの三国。就業人口の約7割が農業に従事。製造業は縫製業や木材加工業などが盛ん。「タイ・プラス1」型の直接投資の受入国であることなどが特徴。		
農産物	コメ（もち米が主流）、トウモロコシ、キャッサバ、コーヒー、ハトムギなど。		
宗教	主に上座部仏教。		
通貨	キープ：1米ドル＝8409キープ（2018年平均）		
気候	熱帯モンスーン。暑季（3～5月）、雨季（6～10月）、乾季（11～2月）に分かれる。		
ユネスコ世界 遺産	ルアンパバーンの町（文化遺産：1995年登録） ワット・プーとチャンパーサック文化圏内の関連遺跡（文化遺産：2001年登録） シェンクワン県の巨大石壺群ージャール平原（文化遺産：2019年登録）		

〔参考資料〕JETROビエンチャン事務所（2020）『ラオス概況』、JICAラオス事務所（2020）『ラオスの概況』、日本アセアンセンターHP、Lao Statistics Bureau（2019）*STATISTICAL YEARBOOK 2018*. IMF（2020）*World Economic Outlook Databases*等により作成。

（3）歴史年表

ラオスの王国の変遷　他国の支配　重要人物　親仏・親米右派の動向　反米左派共産勢力の動向

年月	略史
	ラーンサーン王国の興隆
1353	**ファーグム王**により、**ラーンサーン王国**（ルアンパバーン）が建国される。
1479-1483	大越黎朝（現ベトナム）より、侵攻を受ける。
1560、1566	**セータティラート王**、ビエンチャンに遷都（1560）。タート・ルアン（仏塔）、建立される（1566）。
1574-1603	タウングー王朝（現ミャンマー）に占領される。
1633-1694	**スリニャ・ウォンサー王**の治世で繁栄。
	三国時代とシャムの支配
1707	ラーンサーン王国が**ビエンチャン王国**と**ルアンパバーン王国**（北部）に分裂。
1713	ビエンチャン王国から**チャンパーサック王国**（南部）が独立。三国時代へ。
1779	ラオスの三国は、トンブリー王朝（現タイ）の従属国となる。
1782	トンブリー王朝が倒れ、チャクリー王朝（現タイ）成立。同王朝の支配下に。
1787	ビエンチャン王国、シェンクワンの領土をめぐり、西山朝（現ベトナム）と対立。
1827	**アヌウォン王**による独立運動。翌1828年、鎮圧されビエンチャン王国滅亡。
	フランスによる保護国化と日本軍進駐
1893	仏（フランス）ータイ戦争の結果、ルアンパバーン王国が仏保護国となる。チャンパーサック王国も
1897	チャンパーサック王国、仏保護国となる。
1904	ルアンパバーン王国にて、**シーサワーンウォン王**即位。
1945.3	日本軍、明号作戦によりフランス軍を駆逐、ラオスに進駐。
	ラオス王国独立からラオス内戦へ
1945.8	日本、連合国に降伏。**シーサワーンウォン王**は親仏路線を選択、日本軍下での独立宣言撤回。
1946.4	独立支持者はラオ・イサラ（自由ラオス：反仏ラオス独立支持組織）政府を樹立。
1946.8	フランス連合内で、ラオス王国建国（内政自治権のみ）。国王は**シーサワーンウォン王**。 ルアンパバーン王国を主体とし、チャンパーサック王国は編入される。
1949.7	ラオス王国独立（外交権、軍事権は仏国）。
1950.8	**スパーヌウォン**（王族）と**カイソーン**（インドシナ共産党）によりネオ・ラオ・イサラ（ラオス自由戦線）結成される。
1953.10	仏・ラオス条約により、**ラオス王国**、完全独立。国王は**シーサワーンウォン王（初代）**。
1954.7	インドシナ停戦会議。ジュネーブ協定締結。仏軍はインドシナから撤退。
1955.3	インドシナ共産党ラオス委員会が改組され、ラオス人民党（現・ラオス人民革命党）が結成される。
1956.1	ネオ・ラオ・ハクサート（ラオス愛国戦線）が組織される。
1958.8	プイ・サナニコーン（親米右派）が首相就任。
1959.10	シーサワーンウォン王、崩御。**サワーンワッタナー王（2代）**即位。
1961.5	三派（親米右派・中立派・反米左派）和平会談が行われ、連合政府樹立。2年後に連合政府崩壊。 **ラオス内戦構図**　親米右派・ラオス王国軍×反米左派・パテート・ラオ軍（愛国戦線の戦闘部隊）
1964.4	**米軍（アメリカ軍）**は、王国軍を支援。ホーチミン・ルートやパテート・ラオ勢力地に**空爆を敢行**。 投下された爆弾（**クラスター爆弾、ナパーム弾**など）は**200~300万トン**と言われる。
1965.12	日本の**青年海外協力隊**・第1陣のうち10名がラオスに派遣される（**初の派遣先**となる）。
1968.11	米軍がタム・ピウ洞窟（シェンクワン県）にロケット弾を浴びせ、374名が亡くなる。
1971.12	**ナムグム・ダム完成**（日本の対ラオスODA）。翌年から発電開始。
1972.2	ラオス人民党がラオス人民革命党（現政党）に改称。
1973.3	米軍、ベトナム戦争から撤退。パテート・ラオ軍の優位性が強まる。
1975.12	全国人民代表会議で、**王政が廃止**。**サワーンワッタナー王**、退位。
	ラオス人民民主共和国の成立から現在
1975.12	**ラオス人民民主共和国**が建国される。**社会主義国家**建設が開始。 初代国家主席は**スパーヌウォン**、初代首相は**カイソーン**。第1次社会経済開発5カ年計画
1986.11	第4回党大会。「**チンタナカーン・マイ（新思考）**」を採択し、**市場原理導入と対外開放政策**を展開。
1988.9	「外国投資法」を公布し、外国資本の導入を開始 。
1991.8	**初の憲法制定**。政治や社会制度、国民の基本的権利や義務、国家機構について規定。
1994.4	タイ・ラオス友好橋（第1メコン橋）開通（ビエンチャン近郊）。
1996	第6回党大会。「2020年までに最貧国脱却」を目指す。
1997.7	**ASEAN（東南アジア諸国連合）に加盟**。
2003、2006	経済特区の建設が始まる（2003）。第2タイーラオス友好橋開通（2006.12）。
2013.2	**WTO加盟**。158番目の正式加盟国。
2020	LDC（後発開発途上国）からの脱却を目指したが叶わず。2024年を目標とする。
2021.12	中国ラオス鉄道（中国・ボーテンーラオス・ビエンチャン）、運行開始予定。

〔参考資料〕上東輝夫（1990）『ラオスの歴史』同文館、総務省大臣官房企画課（2006）『ラオスの行政』、JBIC（2014）『ラオスの投資環境』等より作成。

【3】研修の主な活動と目的

（1）ラオス教育支援活動

当ゼミは第59回「桃山祭」（2019年11月）において、第3回「東南アジアのすゝめ」（東南アジア諸国の魅力を伝える展示会）を開催しました。この展示会では、第1回開催時よりラオスの教育支援のための募金協力を来場者に呼びかけています。今回は3万995円が集まりました。「ラオス研修」ではこれを活用して、ビエンチャン近郊の小・中学校2校に学用品やスポーツ用品を贈呈します。加えて、研修に参加した5名は支援先のナコンファン小・中学校の生徒に対し、大学や大阪の観光地紹介、日本語・音楽・サッカー教室を実施し、交流します。微力ではありますが、ラオスの子どもたちの学習環境改善に寄与することを目指します。

（2）ラオス開発研究の検証

当ゼミ3期生4名は2019年度「学生研究発表大会」（2019年12月予選、2020年1月本選）に出場しました。研究テーマは「ラオスの開発のために何が必要か－日本のODAのあり方を中心に－」です。これまでの日本の対ラオスODA（政府開発援助）は、交通インフラや電力インフラの整備・拡充に注力されてきましたが、これからは初等・中等教育への支援をさらに重視すべきことを主張しています。ラオス国内の製造業を育成していく過程で、質の高い労働者の層を厚くする必要があるからです。この発表は大会で高く評価され、最高位の学長賞を受賞しました。現地研修では、JICA（国際協力機構）ラオス事務所やJETRO（日本貿易振興機構）ビエンチャン事務所、ドンカムサン教員養成校などを訪問・視察し、日本の支援の実態やラオスの教育事情を把握することで、ゼミ研究の検証を試みます。

（内山 怜和）

〔表〕「ラオス研修」の2つの柱

ラオス教育支援活動	ラオス開発研究の検証
学内での活動	
ゼミ展示会・第3回「東南アジアのすゝめ」 （第59回「桃山祭」において）	ゼミ研究「ラオスの開発のために何が必要か －日本のODAのあり方を中心に－」 （2019年度「学生研究発表大会」）
ラオスの教育事情を説明 ラオス教育支援の募金協力呼びかけ →　3万995円集まる	初等・中等教育支援の重要性を指摘 ラオス教育事情の問題点を抽出 改善案を提言
ラオス・ビエンチャンでの研修	
小・中学校2校に学用品・スポーツ用品贈呈 大学紹介、日本語・音楽教室 サッカー教室・交流	JICAラオス事務所訪問 教員養成校、小・中学校を視察 ゼミ研究を検証

東南アジアのすゝめ　学生研究発表大会

〔表〕日本国内での活動経緯（2017年11月～2020年2月）

年	日付	主な活動
2017	11 月 13 日	沢田誠二先生（京都教育大学名誉教授）のラオス教育事情についての講義
	11 月 17 日~19 日	第 1 回「東南アジアのすゝめ」（第 57 回 桃山祭）開催
2018	11 月 5 日	沢田誠二先生のラオス教育事情についての講義
	11 月 16 日~18 日	第 2 回「東南アジアのすゝめ」（第 58 回 桃山祭）開催
2019	11 月 4 日	沢田誠二先生のラオス教育事情についての講義とヒアリング
	11 月 16 日~17 日	第 3 回「東南アジアのすゝめ」（第 59 回 桃山祭）開催
	12 月 2 日	ラオスでのサッカー教室準備及びゼミ交流
	12 月 7 日	2019 年度「学生研究発表大会」予選に出場、第 3 会場にて予選通過
	12 月 26 日	ナムさん（2018 年度卒・ゼミ先輩）にラオス教育事情をヒアリング
2020	1 月 11 日	2019 年度「学生研究発表大会」本選に出場、学長賞受賞
	1 月 29 日	2019 年度「学生研究発表大会」表彰式
	2 月 9 日	2020 年度「経済学部新入生ガイダンス」にて登壇、研究発表を披露
	2 月 12 日	ラオスの小・中学校への支援物資（一部）を和泉市内にて調達
	2 月 17 日	ナコンファン小・中学校の生徒に大阪を紹介するための視察
	2 月 25 日	坂田幹男教授（大阪商業大学教授、福井県立大学名誉教授）退職記念講演会に出席

教育支援活動　開発研究の検証　農業事情学習　歴史・文化理解

〔表〕「ラオス研修」日程（2020年3月2日～3月7日）

日付	時間	主な訪問先	テーマ
3 月 2 日	10：30~13：55	関西空港→ノイバイ空港（ベトナム）	移動
	16：40~17：50	ノイバイ空港→ワッタイ空港（ラオス）	
	20：50~21：20	メコン川沿いナイトマーケット視察	経済
3 月 3 日	10：00~11：30	JICA（国際協力機構）ラオス事務所訪問	
	14：00~15：30	ラオス農林省農業局訪問	農業
	15：30~16：00	凱旋門・パトゥーサイ見学	歴史
	15：30~21：30	ナムさん（2018 年度卒・ゼミ先輩）との交流、教育支援相談	教育
	22：00~24：00	翌日の交流に備え、打ち合わせ・リハーサル	
3 月 4 日	終日	ナコンファン小・中学校との交流	
	9：00~9：45	授業視察	
	10：00~12：00	大学・ゼミ紹介、支援物資贈呈、大阪紹介、日本語・音楽教室	
	13：00~16：30	サッカー教室・交流	
	13：40~14：30	ナムさんがムアンバテョン小学校を訪問、支援物資を贈呈	
3 月 5 日	10：00~12：00	ドンカムサン教員養成校及び付属小学校視察	
	12：10~13：50	タート・ルアン湖新世界（中国の開発区）及び ICTT モール視察	経済
	14：10~14：40	タート・ルアン（仏塔）見学	歴史
	16：00~17：00	COPE ビジターセンター（内戦や不発弾処理）見学	
3 月 6 日	10：00~11：30	JETRO ビエンチャン事務所訪問	経済
	15：00~16：00	ワット・シェンクワン（ブッダ・パーク）視察	文化
	夕刻	ワッタイ空港→ノイバイ空港 or スワンナプーム空港（タイ）	移動
3 月 7 日	未明～早朝	ノイバイ空港 or スワンナプーム空港→関西空港	移動

【4】一連の活動を写真で振り返る

（1）日本国内での活動

－2019 年－

第 3 回「東南アジアのすゝめ」開催、2019 年度「学生研究発表大会」予選通過

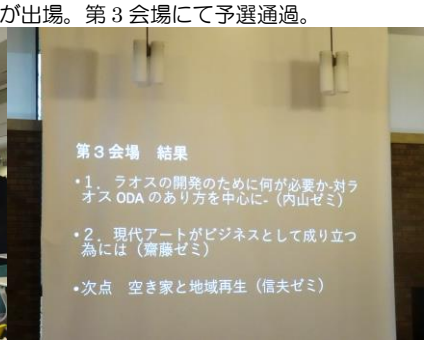
○「演習Ⅲ」・「演習Ⅳ」合同ゼミ（7 月 19 日、22 日、11 月 10 日）・・・4 年次生が 3 年次生に就職活動および展示会について指導。

○沢田誠二先生（京都教育大学名誉教授・DEFC 創設者）によるラオス教育事情についての講義（11 月 4 日）

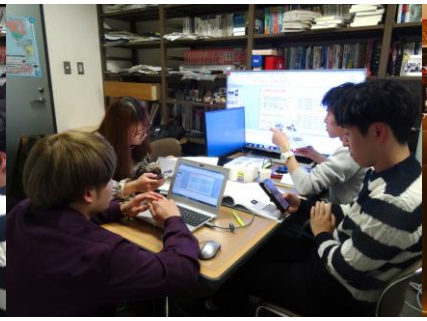
○第 3 回「東南アジアのすゝめ」（11 月 16 日・17 日）・・・3 年次生主催

○サッカー教室準備・ゼミ交流（12 月 2 日）

○「学生研究発表大会」予選（12 月 7 日）・・・経済・経営・社会の 3 学部 41 チームが出場。第 3 会場にて予選通過。



○ナムさん（2018 年度卒・ゼミ 2 期生先輩）にラオス教育事情をヒアリング（12 月 26 日）・・・研究を掘り下げる。



－2020 年 1 月・2 月－

2019 年度「学生研究発表大会」本選にて学長賞受賞、「ラオス研修」準備

○「演習Ⅳ」最終回（1 月 9 日）

○「学生研究発表大会」本選（1 月 11 日）・・・予選を通過した 10 チームが出場。学長賞を受賞。

○「学生研究発表大会」表彰式（1 月 29 日）・・・牧野丹奈子学長より表彰を受ける。

○入学前プログラムで研究発表（2 月 9 日）・・・新 1 年生対象

○支援物資調達（2 月 12 日）・・・和泉市内にて

○大阪紹介のための視察（2 月 17 日）・・・ラオスの中学生対象

○坂田幹男教授（大阪商業大学）退職記念講演会に出席（2 月 25 日）・・・坂田先生は内山先生の指導教授。

（2）ラオスでの研修

―2020 年３月２日―

日本・大阪　→　ベトナム・ハノイ　→　ラオス・ビエンチャン

○関西空港出発

○ベトナム・ノイバイ空港経由

○ラオス・ワッタイ空港到着

○夕食（ラオス料理体験）

―2020 年３月３日―

JICA ラオス事務所、ラオス農林省を訪問後、ナムさんと交流

○JICA ラオス事務所訪問（10：00～11：30）・・・日本の対ラオス ODA について説明を受ける。

○ラオス農林省農業局訪問（14：00～15：30）

○ビエンチャン市内にて支援物資調達（活動の合間に）

○プレゼン・リハーサル（22：00～24：00）

○ナムさん（2018 年度卒・ゼミ 2 期生先輩）との交流、凱旋門・パトゥーサイ、市場・タラートサオ視察（15：30～21：30）

―2020 年3月４日―

終日、ビエンチャン近郊のナコンファン小・中学校にて活動

○授業を視察（9：00～9：45）

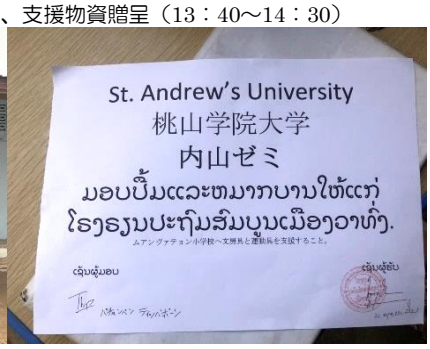
○中学生全学年 80 名を対象に大学・ゼミ紹介、大阪観光地紹介、日本語・音楽教室を開催（10：00～12：00）

○ゼミ紹介の際に支援物資を贈呈（同上）

○サッカー教室およびサッカー交流（13：00～16：30）

○小・中学生との対話（同左）

○ナムさん（2018 年度卒・ゼミ２期生先輩）が代わってムアンバテョン小学校を訪問、支援物資贈呈（13：40～14：30）



―2020 年3月5日―

教員養成校を訪問後、ビエンチャン市内を視察

○ドンカムサン教員養成校視察（10：00～11：00）

○ドンカムサン教員養成校附属小学校視察（11：00～12：00）

○ITECC モール（12：30～ 13：50）

○仏塔・タート・ルアン（14：10）

○沢田先生・サイサモン氏（15：00）

○COPE ビジターセンター見学、不発弾処理について学習（16：00～17：00）

○ビエンチャン・センター（17：15）

○アヌウォン王の像（18：00）

○メコン川沿いナイトマーケット（18：30）

―2020 年3月６日―

JETRO ビエンチャン事務所を訪問、ワット・シェンクワンを見学し、帰国の途へ

○JETRO ビエンチャン事務所訪問（10：00～11：30）

○Sinouk カフェにて昼食（12：00）

○ブッダ・パーク（15：00～16：00）

○市街地の移動（バスやトゥクトゥクを体験）

○ホテルにて（小坪、別行動へ）

○ラオス・ワッタイ空港出発（夕刻）

○関西空港到着（3 月 7 日朝）

○帰国について

内山先生：3 月 6 日深夜、ベトナム・ハノイ経由で翌朝帰国。

伊藤・猪俣・高井・武田：同日深夜、タイ・バンコク経由で翌朝帰国。

小坪：3 月 6 日夕刻より、単独行動。翌朝、ビエンチャンよりタイ・チェンマイへ。

3 月 7 日~10 日、「経済学部 ABCP」（2018 年度）で交流のあったチェンマイ大学学生と旧交を温める。

3 月 11 日、ラオス・ビエンチャンよりベトナム・ホーチミン経由で翌朝帰国。

（研修参加者一同）

２．ラオス教育支援活動

【１】展示会「東南アジアのすゝめ」

例年 11 月の「桃山祭」（大学祭）において開催する、当ゼミの展示会です。2017 年度にゼミ 2 期生の発案で始まり、その後、後輩ゼミ生に引き継がれ、2019 年度で第 3 回目を迎えました。ゼミの学修対象である東南アジア諸国について、地域の方々や桃大生にその魅力を知ってもらおうとの趣旨で、開催しています。具体的な取り組みは、以下のとおりです。

（１）東南アジア各国の資料展示

1 カ国ずつ展示スペースを設け、歴史年表や経済概況、観光地の見どころなどを紹介します。私たちゼミ生は皆、担当（専門とする）国があり、責任をもって資料作りをします。開催中は、来場者に資料の説明やゼミ紹介をしたり、質問を受け付けたりします。当地に旅行や留学を検討している方や、勤務・出張経験のある方々が特に関心を示してくれます。

（２）民族衣装の展示

留学生や DEFC（後述）から借用し展示します。ベトナムのアオザイやラオスのシンなど、色鮮やかな民族衣装は、会場を華やかにします。

（３）クイズ大会

東南アジアに関するクイズを多数出題します。「マレーシアで信仰されているイスラム教では、次のうちどれを食べてはいけないでしょう？」や「インドネシア・スカルノ大統領の第三夫人は次のうち誰でしょう？」、「ラオスの地図上にある赤い点は何を示しているでしょう？（答え：ラオス内戦に介入した米軍による爆撃）」など、経済や地理、社会・文化、宗教など、様々な分野から出題し、楽しく学習できるように工夫しています。4 つ 5 つの選択肢を用意しているため、その場で想像を膨らませ、解答することができます。

（４）海外渡航経験者による報告会

海外研修や個人旅行などで、東南アジア・東アジアに渡航経験のあるゼミ生が現地の様子や経験を発表します。これまで、「経済学部 ABCP」（マレーシア・タイ）、「BSP」（タイ・ベトナム・中国・香港・台湾）参加者、タイ・ラオスに個人的に旅行したメンバーが現地の様子や経験談を発表しました。

（５）世界地図パズルコーナー

世界地図のパズルを数種類用意しています。幼稚園児から小学生まで、興味を持って挑戦してくれます。難度が高く困っているときは、私たちが手助けをします。

（６）ラオス教育支援のための募金活動

後述します。

＊児童文化研究会の皆さんに依頼して、バルーン・アート（動物や剣など様々な形をした風船）を多数作成してもらい、会場を飾り付けしています。

（高井 寿彦）

○第 1 回「東南アジアのすゝめ」（2017 年 11 月 18 日~19 日）：3 号館 3ー302 教室にて

クイズ大会（司会：竹内克）　同左（司会：福田敦也）　海外体験報告（中川忠）　集合写真

○第 2 回「東南アジアのすゝめ」（2018 年 11 月 16 日~18 日）：3 号館 3ー203 教室にて

黒板題字（筆：武田望）　案内プレート・チラシ作成　3 号館入口付近の案内看板

クイズ大会（司会：高井寿彦）　展示会全景　集合写真

○第 3 回「東南アジアのすゝめ」（2019 年 16 日~17 日）：3 号館 3ー209 教室にて

クイズ大会（司会：小坪唯人）　同左（司会：高井寿彦）　開場前打ち合わせ

ラオス教育支援のための募金活動　募金に協力する来場者　集合写真

【2】募金活動と支援物資の贈呈

（1）2017 年度・2018 年度の活動

「東南アジアのすゝめ」では、ラオス教育支援のための募金活動をしています。展示会を社会貢献につなげようと試みたもので、第 1 回開催当時、ゼミに所属していたラオス人留学生、ナムさん（Ms. Phachanpheng Thipphaphone：2018 年度卒）の母国を教育支援の対象としました。内山先生からは「来場者に募金協力を呼びかける以上、ラオスの教育事情をしっかり把握した上で活動しなければならない」との指導があり、毎年「桃山祭」前には DEFC（下記参照）創設者の沢田誠二先生（京都教育大学名誉教授）がゼミに招聘され、ラオスの経済事情や僻村の不十分な教育環境、その改善に向けた DEFC の活動などについて、講義をされます。沢田先生は 2003 年から 2005 年にかけて、ラオス教育庁で JICA 訪問派遣専門家として勤務し、翌 2006 年に DEFC を立ち上げ、ラオスへの教育支援活動を今日まで継続されています。そんな沢田先生に習い、私たちも活動に取り組んでいます。

◯DEFC： Demining and Education For the Children（子どもたちのための地雷除去と教育）
ラオス政府認証の NPO 法人。2006 年開設。「爆弾ではなく学校を、地雷ではなく教科書を」を標語に掲げ、小・中学校校舎・生徒寮の建設、奨学金の供与、学用品の提供、残留不発弾啓発などに取り組んでいます。

「東南アジアのすゝめ」では毎年 2～3 日間の開催で、来場者は 150～270 名ほどです。ゼミの志や活動を応援してくれる地域の方々・桃大関係者が募金に協力をしてくださいます。第 1 回開催時は 2 万 45 円が集まり、主催したゼミ 2 期生の先輩方は DEFC のラオスでの活動資金のために寄付しました。3 期生が主催した第 2 回開催時は、2 万 7410 円の募金があり、今度は「ノートや教科書などの学用品を小・中学校に届けてください」と依頼する形で DEFC に寄付をしました。このとき、桃大の紹介や展示会の趣旨、子どもたちへの思いをしたためた手紙を添えました。支援物資の調達や支援対象校の選定については DEFC に担っていただき、ルアンパバーン県の 4 つの小・中学校、高校（フエイイェン小学校、ナムガー中学校、ナニャン中学校、ナムツアム高校）への支援が実現しました。

（猪俣 遼一）

〔写真〕松本卓朗氏（DEFC 代表）がナムガー中学校で学用品を贈呈する様子（2019 年 2 月）

◯桃大ニュース：経済学部・内山ゼミ生の募金活動により、ラオスの学校に学用品が寄贈されました（2019 年 3 月 22 日付）https://www.andrew.ac.jp/newstopics3/2018/hl026a000000dhrw.html

（2）2019 年度の活動

第 3 回「東南アジアのすゝめ」（2019 年 11 月）はゼミ 4 期生（3 年次生）が中心となり開催しました（4 年次生はサポート）。2 日間の開催でおよそ 200 名の来場者があり、ラオス支援のための募金は過去最高の 3 万 995 円が集まりました。今回はラオスの子どもたちに支援物資を私たちが直接届けることを目指しました。内山先生の協力を得て、「ラオス研修」という形で現地を訪問することになります。ラオスへの渡航を希望するゼミ仲間は多数いましたが、最終的に 5 名となりました。支援先については、当ゼミと縁のある首都・ビエンチャン近郊の 2 校を対象としました。

①ナコンファン小・中学校への支援

1 校はナコンファン（Nakhoneheuang School）小・中学校（私立校）です。DEFC の支援先の一つで、沢田先生による斡旋で訪問し、支援とあわせて、まる 1 日の交流をしました（詳細は後述）。同校には、交流の一環でサッカー教室を実施するため、スポーツ用品を中心に物資を贈呈しました。特筆すべきは組立式サッカーゴール（3m×2m×1.2m、約 11kg）2 台です。日本で購入したものを持ち込み、現地で組み立てました。運ぶのに一苦労でしたが、子どもたちの喜ぶ姿に癒やされました。同校にはもともとゴール 1 セットが設置されていたため、これからは 2 カ所（4 台）でサッカーができるようになります。その他、多数のサッカーボールとコーン、野球用のカラーバットとボール、けん玉などの遊具、大阪を紹介するためのご当地グッズなどを贈呈しました。

〔写真〕ナコンファン小・中学校でのスポーツ用品贈呈とサッカーゴールの組立の様子（2020 年 3 月 4 日）

②ムアンバテョン小学校への支援

もう１校はゼミ先輩のナムさんより、「特に支援を必要としている」として、要請があったムアンバテョン小学校（Meuang Va Thong School：公立校）です。私たちは日程の都合で訪問が叶わなかったため、ナムさんがゼミを代表して訪問しました。同校には、ノート 300 冊とサッカーボール 8 個を贈呈しました。受け取った子どもたちからとても感謝されたと伺っています。ドンジャン（Ms. Pouttasin Doungjan）校長先生より、以下のメッセージをいただきました。

（武田　望）

○ムアンバテョン小学校・ドンジャン校長先生からのメッセージ
「桃山学院大学 内山ゼミの皆さんへ。本日、文房具と運動具を支援していただき、本当に感謝しております。子どもたちがとても喜びました。このように優しくしていただいたことを決して忘れません。皆さんのご多幸とご健康をお祈りしています。」（ナムさん訳）

〔写真〕ナムさんがムアンバテョン小学校にノート、サッカーボールを贈呈する様子（2020 年 3 月 4 日）

〔表〕ラオス教育支援活動の展開

	第１回 （2017 年度）	第２回 （2018 年度）	第３回 （2019 年度）
募金金額	2 万 45 円	2 万 7410 円	3 万 995 円 ＋1 万円（＊）
支援内容	DEFC のラオスでの教育支援活動に寄付。	ルアンパバーン県の小・中学校、高校の 4 校に学用品・スポーツ用品を贈呈。DEFC に委託。代表の松本氏が訪問。	・ナコンファン 小・中学校を「ラオス研修」参加者が訪問。スポーツ用品を贈呈。 ・ムアンバテョン小学校にナムさんが代表で訪問。学用品を贈呈。
贈呈品		＜学用品＞ ・各種のノート計 800 冊 ・学生用と先生用定規など 4 セット ・ボールペン 250 本 ・クレヨン 10 箱 ・英語／ラオス語の子供向け勉強本セット 1 セット ＜スポーツ用品＞ ・セパタクローのボール 3 つ	＜学用品＞ ・学習用ノート 300 冊 ＜スポーツ用品＞ ・組み立て式サッカーゴール 2 台 ・サッカー用ボール 14 個、コーン 8 個 ・野球用カラーバット 2 本、ボール 12 個 ＜遊具＞ ・けん玉 2 個　・ダーツ 2 点 ＜大阪紹介ご当地グッズ＞ ・大阪観光地はがき 20 枚 ・大阪城マグネット 20 個

＊第 3 回は「学生研究発表大会」で受賞した学長賞賞金の一部 1 万円を支援金に追加。

【3】ナコンファン 小・中学校との交流

〔表〕タイムスケジュール（2020 年 3 月 4 日）

時間	内容
9：00~9：45	校内および授業視察
10:00~11:30	大学・ゼミ紹介、大阪の観光地紹介、日本語教室、音楽教室
13:00~16:30	サッカー教室・交流

（1）授業視察

ナコンファン 小・中学校には、沢田誠二先生から斡旋していただき、経営者のサイサモン氏（Ms. Saysamone Khamsouktavong）の受け入れのもと、交流が実現しました。ラオスの小・中学校への訪問は、第 2 回「東南アジアのすゝめ」（2018 年 11 月）に取り組んでいた頃から、「いつかは実現したい」と思い描いていたことで、当日はとてもワクワクしました。同校は生徒数が約 300 名の私立校です。ビエンチャン郊外に位置し、周辺にはラオス国立大学があります。午前 9 時より、沢田先生（DEFC の活動でラオス滞在中）の案内で、小学 1~5 年生、中学 1~4 年生の授業風景を見学しました。各教室 15~20 人ほどの生徒が授業を受けており、国語（ラオス語）や算数・数学、英語などの科目が開講されていました。先生の説明を受けて勉強する座学やグループに分かれてディスカッションするスタイルなど、様々な形式で行われていました。手をあげて、問題を解答する生徒の姿など、とてもイキイキしていました。そして 10 時から、中学生全生徒約 80 名との交流が始まります。私たちは英語で話をして、ヴィサイ（Mr. Visay）校長先生（英語・中国語担当）がそれをラオス語訳する形で行われました。以下、交流内容の詳細を示します。

〔写真〕ナコンファン小・中学校の校舎（2020年3月4日）

（伊藤 和輝）

〔写真〕ナコンファン小・中学校の授業風景（同上）

（2）大学・ゼミ紹介

冒頭にヴィサイ校長先生より、私たちが日本から来た大学生で、同校への支援と生徒との交流を目的に訪問していることが説明され、バトンが渡されます。私たちは一人ひとりが自己紹介をした上で、まず桃山学院大学（以下、桃大）および内山ゼミの紹介をしました。

桃大のルーツは英国人宣教師が聖三一教会内に開設した小学校・神学校で 1884 年まで遡ることや、キリスト教の精神に則った大学で現在は大阪府和泉市にキャンパスを構えていること、経済・経営・社会・国際教養・法の 5 学部が設置されていることなど、キャンパスや教室の写真をまじえて説明しました。プロジェクターやモニターは設置されていないため、パワーポイントのスライドを大きくプリントアウトした用紙（A3）で示しました。私たちがどこから来たのか、どういう団体なのかをまず認識してもらい、日本の一大学がどのような様子であるかを知ってもらおうと試みました。ラオスでは、高等教育機関への就学率が低いため、大学への関心を高めてもらおうという狙いもありました。

〔写真〕桃大・ゼミ紹介の様子（2020 年 3 月 4 日）

内山ゼミについては、経済学部のゼミで東南アジア経済を学んでいることや、大学祭での「東南アジアのすゝめ」開催、来場者へのラオス教育支援の募金協力呼びかけなどを紹介しました。このうえで、先述のサッカー用品をはじめとする支援物資の贈呈を行いました。同校の生徒から大きな歓声と拍手をもらい、とても感動的なシーンとなりました。

（高井 寿彦）

（3）大阪の観光地紹介

大阪は日本有数の大都市圏であり、近畿の経済・文化の中心地であることを説明し、各観光地の話をしました。難波の道頓堀、心斎橋筋商店街、大阪城、通天閣、あべのハルカス、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）、海遊館などです。この紹介のために、2 月 17 日には、大阪市内を視察し、写真撮影をしていました。ラオスの子どもたちにとって、大阪の高層ビル群や日本の城郭など、すべてが珍しい光景で、目を丸くしていました。番外編で、和泉市の池上曽根遺跡（弥生時代）についても扱いました。

〔写真〕大阪観光地紹介の様子（同上）

（武田　望）

（4）日本語教室

続いて、日本語教室を開講しました。あいさつに関わるキーワードを紹介し、生徒の皆さんには発声練習をしてもらいました。中には、日本語を独学で勉強しているという生徒が 2 名いましたので、ステージに出てもらい、自己紹介のフレーズなど、日本語会話を実演しました。その他、日本の慣用句として、「急がば回れ」、「時は金なり」を紹介しました。特に「こんにちは」等の挨拶文が親しみやすく、覚えてもらえた感触がありました。

また、本教室終了後に日本語学習でどのような媒体を用いているのかヒアリングしたところ、2 名とも「アニメ」、「漫画」から学びを得ているとのことでした。日本の「アニメ」がラオスでも人気が高いことを知り、日本が誇る文化の一つであることを再認識しました。また、国境を越えて彼らと共通のアニメ作品の話題で意見交換できたことは、今でも忘れられない思い出の 1 つです。

〔写真〕日本語教室の様子（2020年3月4日）

（伊藤 和輝）

（5）音楽教室

午前中最後の取り組みとして、音楽教室を実施しました。ラオスではコンクールに出る一部の生徒を除き、学校内で音楽や歌に触れる機会がほとんどないという話を聞いていました。歌の楽しさを知ってほしいとの思いから企画した「かえるの合唱」の輪唱。実際にやってみると日本語で歌うということもあり、声を合わせるだけで精一杯でした。しかし「ゲロゲロ」と擬音の多い変わった歌詞を、楽しみながら歌う子どもたちの姿を見て、実施してよかったと思いました。

（猪俣 遼一）

〔写真〕音楽教室の様子とナコンファン中学生の皆さん（同上）

（6）サッカー教室

研修メンバーの一人、小坪です。私には幼い頃から高校時代まで、本格的にサッカーに打ち込んできた経験があります。今回の訪問では、その経験と技術をラオスの子どもたちに少しでも伝えたいと思い、他のメンバーと相談の上、サッカー教室を実施しました（交流日午後）。訪問前、ラオスではサッカーがどれほどなじみのあるスポーツであるのか、十分に把握しきれていませんでしたが、子どもたちと直に接することで、非常に人気の高いスポーツであることが伺えました。内山先生が私を「プロ選手に近いプレイヤー」と紹介したことで、子どもたちは目を輝かせて、私のもとに来ました。手本としてドリブルやシュートを実演したり、相手チームのプレイヤーとボールを競う際の上半身・手の扱い方などを身振り手振りで解説したりしました。生徒たちが真剣にサッカー教室に取り組んでくれたことがとてもうれしかったです。中には、同じグレーのユニフォームに身を包んでいる生徒が多数おり、話を聞くと、週末にクラブチームで練習しているとのことでした。彼ら個々人のプレーの質は高く、驚かされました。ただ、チームの戦術や連携への意識が足りない部分がありましたので、それを改善すれば、さらに上達するなどアドバイスしました。その他、C.ロナウド選手（現ユベントスFC、イタリア・セリエA）のフリーキック時のシュートを真似て見せることで、楽しませたりもしました。

サッカー教室は私が教えるだけでなく、ゲーム（試合）形式でも進めました。最初のゲームは、私たち桃大・内山ゼミ（6名）VS ナコンファン中学生代表（8名）で10分ハーフの計20分で対戦しました。前半までは1－1と善戦したものの、後半はゼミメンバーの息があがり、続けざまに失点し、その後はご想像のとおりです（笑）。中学生の豊富な運動量に脱帽です。他のゼミメンバーは、中学・高校時代にバスケ部、テニス部、剣道部、書道部などで、サッカー部出身ではありませんでしたが、皆が必死のプレーをすることで子どもたちを楽しませました。唯一女子で参加の武田さんと内山先生も参戦してくれました。その後も、メンバーを入れ替えて、何試合もゲームを重ねたことで、中学生との絆が芽生えてきました。交流を終えたときには、「また会いましょう」、「連絡先を教えてください」、「日本にぜひ行きたいです」といった声を多くの生徒からかけられました。私たちにとっても、子どもたちにとっても、本当によい1日になりました。

（小坪 唯人）

〔写真〕サッカー教室の様子（2020年3月4日）

（7）総括

ナコンファン中学生との交流は、「教育支援活動」のクライマックスだったと言ってもよいでしょう。ゼミ生5名の活躍ぶりは、とても輝いていました。取り組み自体は、「大学祭で展示会を開催し、そこで募金を集める。それを元手に支援物資を購入し、現地へ届ける。」というだけのことですので、「教育支援活動」というには大げさかもしれません。しかし、微力ながらもラオスの小・中学生数百名の役に立ったことは間違いないでしょう。贈ったサッカーゴールは今後10年以上使用され、計15個のサッカーボールは、多くの生徒が触れることになります。一人ひとりが受け取った一冊のノートは、彼らの学習をサポートするでしょう。また中学生にとって、ゼミ生との交流は、異国の社会・文化に触れる機会となり、刺激的だったでしょう。放課後も、多くの生徒がなかなかゼミ生から離れようとしませんでした。彼らにとっても、ゼミ生の姿は、頼もしく輝いて映っていたに違いありません。

当ゼミの「ラオス教育支援活動」は、大規模にその支援を展開するのが目的ではなく、活動を通して、ゼミ生が開発途上国やラオスについての理解を深めることに主眼をおいています。短い期間ではありましたが、現地に足を踏み入れ、活動したゼミ生は、小中学生の様子や街の様子を目の当たりにし、様々なことを感じ、吸収したでしょう。また、ゼミ生は教育支援活動と並行して、「ラオスの開発」をテーマに研究しています。次節では、学内での研究発表と、現地での「開発研究の検証」について報告します。

（内山 怜和）

〔写真〕ナコンファン小・中学校の皆さんとの記念撮影（2020年3月4日）

3．ラオス開発研究の検証

【1】「学生研究発表大会」での報告要旨

私たちは、2019 年度「学生研究発表大会」（桃山学院大学主催）に出場しました。テーマは「ラオスの開発のために何が必要かー日本の ODA のあり方を中心にー」です。途上国をいかに発展させるかは、開発研究の主要なテーマとなります。ラオスを対象としたのは、「桃山祭」でのゼミ展示会「東南アジアのすゝめ」で同国の教育支援に携わってきたことが大きな理由です。また、ラオスは人口小国、内陸国、国土の大半が高原や山岳地帯であるなど、経済発展に不利な条件が多く、今後の成長には政府の施策が大きな鍵を握ります。開発研究の重要性が高いと考えたのがもう一つの理由です。国連によって、今なお LDC（後発開発途上国）に位置づけられるラオスが今後発展を遂げるために何が必要となるか、また日本が ODA（政府開発援助）で支援できること、すべきことは何かを研究課題としました。

〔写真〕学生研究発表大会・本選での発表（2020年1月11日）

◯構成 はじめに　なぜラオスに着目するか？ １．ラオスの経済状況 ２．日本の対ラオス ODA の経緯と実績 ３．これから求められる ODA とは ４．ラオスの初等教育における問題点と対策 まとめ　私たちの提言
◯桃大公式 You Tube チャンネル：2019 年度「学生研究発表大会」学長賞チームの発表 https://www.youtube.com/watch?v=tZ2UA70R8sc（巻末付録参照）

（1）ラオスの経済状況

⇒経済は鉱物資源と電力依存、製造業は低付加価値など脆弱性を抱える。

ラオス経済は、大きく以下の 2 点から、脆弱性が指摘されています。1 つ目は銅や金などの鉱物資源と水力発電による電力の輸出により、経済が支えられている点です。2018 年の貿易構造をみると、輸出の 53%をこの 2 部門が占めています。鉱物資源はいつか枯渇するため永久的ではなく、価格は世界市況に左右されるため、安定的であるとはいえません。一方、水力発電には環境問題がつきまといます。2 つ目は、製造業が労働集約的産業中心である点です。業種は様々ありますが、高付加価値で強みのある産業が育っていません。日本では、「タイ・プラス 1」型の投資が注目されていますが、これもやはりタイの本工場から低付加価値の工程のみ、周辺の低所得国、ラオスに移すというものが主流です。鉱物資源と電力への依存を続け、製造業が育たない状況が続く限りは、先進国や ASEAN 先発国との差を縮小す

ることは難しいと考えます。また、AFTA（ASEAN 自由貿易地域）の進展、AEC（ASEAN 経済共同体）の創設（2015 年 12 月）により、域内の関税がほぼ撤廃され、貿易の自由化が加速しています。これはラオスにとって、チャンスでもあり、競争にさらされる危機でもあるため、同国の経済的底上げが重要となります。

（2）日本の対ラオス ODA の経緯と実績

⇒これまでの支援は交通インフラ・電力インフラの建設・整備に注力。

日本の対ラオス ODA は、1958 年の「日・ラオス間経済及び技術協力協定」の署名に始まります。これ以降、日本は様々な分野で開発協力をしてきましたが、特に注力したのは交通インフラと電力インフラの建設・整備です。交通インフラは、主に空港、道路、橋梁が対象です。空港については、ワッタイ国際空港（首都ビエンチャンの玄関口）の滑走路延長工事や高速離脱誘導路の建設、ターミナル拡張工事などを実施しています。道路は、ビエンチャン 1 号線（ビエンチャン中心部と郊外のターナレーン駅を結ぶ）や国道 9 号線（東西経済回廊）の整備など、橋梁はパクセー橋や第 2 メコン国際橋、国道 13 号線の橋梁などで、メコン川本流・支流への架橋をしています。有償・無償を問わず、一つのプロジェクトにつき数十億円という規模で ODA が実施されてきました。これらはラオス国内の流通や隣国・諸外国とのアクセスを改善、経済交流を促進しました。また電力インフラについては、メコン川の支流にダムや水力発電所の建設、送電線の設置などがなされました。特に、ナムグム・ダムの建設は 1960 年代から取り組まれた大規模プロジェクト（1971 年竣工）で、日本の対ラオス協力の象徴的事業です。今日、水力発電による電力は隣国のタイに多く輸出され、ラオスにとって貴重な外貨獲得源になっています。このように、日本の ODA で建設・整備された交通インフラや電力インフラが、ラオスの経済発展を下支えしています。

（3）これから求められる ODA とは

⇒人材育成への協力強化。特に初等・中等教育、ソフト面への支援が重要。

経済・社会インフラについて、ラオス国内ではまだ未整備で不十分な点が数多くありますので、引き続き ODA での支援が求められることでしょう。しかし、インフラは経済活動の土台となるものの、その先のラオスの自立を見据えた場合、それだけでは十分ではありません。鉱物資源・電力依存からの脱却には、経済を牽引する製造業の育成が不可欠となります。このためには、製造業を支える人材を充実させていく必要があります。そこで、今後の ODA のあり方として、人材育成への協力を強化すべきではないかと考えます。これまでも人材育成分野への支援がなかったわけではありません。その内容は、日本ラオス人材協力センター（ラオス国立大学内）の設置や高等電子技術学校の改善、教育用機材の提供、小学校の建設、奨学計画などです。高等教育機関への支援（日系企業との連携を含む）および校舎の建設などハード面の支援に注力してきたことが伺えます。これらはラオスの人材育成にとって大切なことです。しかし、私たちはこれまでの人材育成への支援について、評価を△としました。初等教育・中等教育への支援、教員の質向上といったソフト面への支援が少なく、不十分であると考えたからです。ラオスでの高等教育機関への就学率は 2014 年時点で 17.3％（UNESCO 資料）と低くなっています。高等教育の充実は技術者、経営者や中間管理職などを育成する観点で有効ですが、一部のエリート層の強化にとどまります。

日本政府は『対ラオス人民民主共和国 国別開発協力方針』（2019 年 4 月）において、 重点 4 分野の一つに、「産業の多角化と競争力強化、そのための産業人材育成」を掲げています。「教育環境の整備（教員の質の改善、理数科教育の強化等）、高等教育、日本の留学事業への支援を実施する」としており、人材育成への意識の高さが伺えます。この中でも、私たちは初等・中等教育への支援を重視すべきことを主張します。初等・中等教育の支援を拡充する

ことができれば、それだけ多くの子どもたちが恩恵を受けることになり、将来的に国内の製造業を担う質の高い労働者の層を厚くすることにつながるからです。ラオスの初等・中等教育の環境は、教員の質の低さや不足などの問題点が指摘されています。こうした点を改善すべく、ソフト面の支援も強化していかなければならないと考えます。

（4）ラオスの初等教育における問題点と対策

⇒教材の質、教員の質の低さに着目

ラオスの初等教育の実情を把握するべく、ラオス教育支援を 2003 年以降展開されている沢田誠二先生（京都教育大学名誉教授、DEFC 創設者）と、ラオス出身のナムさん（ゼミ 2 期生先輩）にヒアリング調査を実施しました。お二方とも、情報には古い部分や今現在は改善されている点、地域によって事情が異なる点などがあることを前置きされた上で、ラオスの教育事情について話をしてくれました。浮かび上がった課題は、以下の 5 つに分類できます。1 点目は「教材の質」です。教科書の説明が悪い部分や誤りが多いこと、教員用の指導書のレベルが低いことです。2 点目は、「教員の質」です。2 年間の教員養成校に通うだけで、小学校教諭になることができるため、教科書の誤りを理解、訂正できない場合があります。3 点目は「家庭事情」です。特に農村では、農繁期に子どもたちも農業に従事し、授業を長期間欠席せざるをえません。これにより、年に一度の進級試験に合格できず、留年や中退につながります。4 点目は、「地域間格差」の問題です。首都の学校では比較的新しい教材が使用されますが、地方は教科書が行き届かず使い古しが多いこと、奨学金の申請は首都でしか申し込みできないことがあったそうです。また、地方の中学校では下宿する生徒の生活環境が劣悪な場合があります。その他、ラオス語が母語でない少数民族が授業についていけないことや、国語では音読させて指導することがなかったことなどです。これらはどれも改善すべき深刻な問題ですが、国家の責任が大きい学校教育に焦点を当て、対策を考えます。

「教科書に誤りがある」、「教員用の指導書のレベルが低い」という問題については、教科書および指導書の開発を支援するプロジェクトが求められます。ラオスと同様に開発が遅れているミャンマーに対する ODA では、「初等教育カリキュラム改訂プロジェクト」があり、教科書・教員用指導書の開発、新しい学習評価ツールの構築、新カリキュラムに基づいた教員養成課程の設置などが実施されています。「教員の質が低い」という問題については、教員養成課程の見直しや、現職教員研修の強化などが不可欠です。経済発展段階において一歩先を行くベトナムでは、「現職教員研修改善プロジェクト」があります。児童中心型教育の導入を支援することが目的で、暗記や教員の説明中心の授業からの転換を指導する教員研修や学校管理職のマネジメント能力向上研修などが実施されています。こうしたプロジェクトがまさにラオスにとっても必要となるでしょう。

（5）私たちの提言

⇒初等教育・中等教育を充実させて、優秀な人材の層を厚く！

日本はラオスに対し、これまで交通インフラや電力インフラへの支援を重点的に実施してきました。教育面については、高等教育やハード面への支援が中心でした。これからは、より多くの国民が恩恵を受けられる初等・中等教育への支援、教科書・指導書の改善、教員の質向上などを目指したソフト面の支援を強化していく必要があります。これらによって、高等教育に適応できる優秀な人材を増やし、ラオス経済を牽引する産業を担う人材の層を厚くします。これによって、ラオスは経済的脆弱性を克服し、持続的成長、将来的な経済自立を目指すべきと考えます。

（伊藤 和輝）

【2】JICA ラオス事務所

訪問日：2020 年 3 月 3 日　応接者：次長・押切 康志氏

ODA 実施機関である JICA（国際協力機構）ラオス事務所を訪問し、ラオスの経済や教育事情、今後の開発協力計画について、お話を伺いました。以下、ヒアリング内容を要約します。

（1）ラオスの経済事情

ラオスの GDP 成長率は 6.2%（2018 年）と依然として、高い水準を維持しています。経済を支えているのは、電力と地下資源で、貿易構造を見ると、輸出はこの 2 部門で 44%を占めています（電気が 21%、金鉱石が 14%、銅・同製品が 9%）。いわゆる資源経済で、これには負の側面があります。「資源の呪い」や「オランダ病」といった言葉で指摘されるように、資源で得た資金が立派な庁舎やサッカー場の建設などに向かい、国民の生活や福祉に貢献しない、製造業が育たないといったことが起こりうるからです。また、水力発電は雇用を生み出さないという問題もあります。規模にもよりますが、水力発電所は 30 名程度で運転することが可能です。産業別労働人口比でみても、第 1 次産業に従事しているのが 68%で、製造業は 9%程度にとどまります。

日系企業の進出は 160 社程度で、このうちラオス日本人商工会議所への加盟数は、105 社です。他の ASEAN 諸国と比べて少なく、日系企業にとって、メジャーな投資先ではありません。進出しづらい理由として、2 点あります。一つは内陸国であるため、輸送コストが高い点です。近くに港を有するバンコクから大阪に、40 フィートコンテナを輸送した場合は 1000 ドル程度であるのに対し、ビエンチャンからは陸路でレムチャバン港（タイ）またはダナン港（ベトナム）を経由するため、倍の 2000 ドルほどかかると言われています。もう一つは人口密度が低いことです。本州ほどの国土に 700 万の人口しかないため、大規模な工場運営は難しく、実際のところ従業員数は 1000 人未満の規模が多いです。

〔写真〕押切氏による講義の様子（2020年3月3日）

その他、タイやマレーシアなど先進 ASEAN 諸国が歩んだような、豊富な労働力を武器に労働集約的産業を呼び込み、徐々に自国産業で代替し工業化を進める戦略をラオスも目指す傾向にあります。しかし、上記の地理的・人口的条件から厳しく、悩ましい問題です。

⇒（感想）
・水力発電所は少人数で操業できることを聞いて、驚きました。資源経済および電力への依存は問題であると認識していたものの、雇用を産まないという問題点もあるのかと新たな気づきとなりました。
・大規模な工場運営は難しく、従業員数は 1000 人未満の規模が多いということですので、中小企業にチャンスのある国だと改めて思いました。
・40 フィートコンテナの輸送において、バンコクー大阪間と、ビエンチャンー大阪間で、価格に倍の差が出ることは、ラオスにとって大きな痛手だと思います。

（2）日本の対ラオス開発協力計画

JICA は対ラオス ODA を独自に政策決定するのではなく、ラオスが目指す経済・社会や政策をサポートするというスタンスです。もとになるのは、ラオス政府が 5 年毎に打ち出す『国家社会経済開発計画』（現行は第 8 次、いわゆる 5 カ年計画）です。ただ、これは包括的なもので日本政府としてすべてには対応できないため、別途、両国で協議し、『ラオスの持続的な発展に向けた日本・ラオス開発協力共同計画』（2016 年 9 月）を策定しています。ここでは、協力の 3 本柱が示されています。

①周辺国とのハード・ソフト面での連結性強化
主に交通・運輸インフラ支援を指します。これまでに国際道路（東西回廊や南北回廊）や、国内道路網・橋梁など、着実に整備されてきましたが、今後は特に運営や維持管理のためのサポートが必要となります。道路の場合、10 年経過すると、劣化が激しくなります。また、制度などのソフト面の連結性を強化していかなければなりません。

②産業の多角化と競争力強化、そのための産業人材育成
ラオスの主力産業は電力と鉱業です。電力を輸出するには、送電線が必要であり、遠隔地に輸出するのは困難です。このため、輸出先は隣国のタイ、ベトナムなどにしぼられます。これらの国はエネルギー安全保障の観点から、特定の電源（ラオスー国）に大きく依存するわけにはいかない事情があり、安定的な需要が期待できるとは限りません。一方、地下資源はいつか枯渇するものであり、銅については近年、すでに生産量が落ちてきています。こうした事情から、産業を多角化していくことやそのための人材育成が必要となるのです。

③環境・文化保全に配慮した均衡のとれた都市・地方開発を通した格差是正
ポイントは格差是正です。首都ビエンチャンでは道路が舗装されていますが、地方では必ずしもそうではありません。そうした部分を補っていかなければいけません。また、地方から都市部に仕事を求めてやってくる若者が多いのですが、地価の安い土地に集中して居住すると、上下水道や廃棄物処理で過度の負担がかかるため、歪みが出ないようにしなければいけません。

⇒（感想）
・交通運輸インフラについて、建設だけでなく、運営や維持管理の支援の必要性があることは盲点でした。
・電力の輸出は送電線が必要で輸出先は隣国に限られるため、輸出量の増大は難しく、この分野への依存体質はやはり好ましくないと思いました。
・開発協力の 3 本柱について、より具体的な内容を知ることができ、勉強になりました。

（3）ラオスの教育事情と ODA による支援

ラオスの学年制は 5・4・3・4 制で、2015 年に中学校までの 9 年間が義務教育化されています。近年の小学校への入学率は 98%程度となっており、100%に近づけるためには、ラオス語が母語ではない少数民族や障害のある子どもたちをどうするか等の問題を解消していく必要があります。しかし、小学校 5 年生残存率や中学校進学率は 80%程度と不十分ながら、以前と比べて改善しており、量的な拡大は実現しています。

これからは、質をどうするかが特に課題となります。教育の成果たる生徒の学力について、国際的な学力比較テストでは厳しい結果になっています。特に、算数に難があるとの結果が出ています。要因の一つとして、教員の質に問題があることが以前から指摘されています。例えば、国語では小学生にそぐわない難解な文章を読ませたり、文法についてもことこまかに指導することがあり、算数では掛け算を習う前に、面積を求める勉強をするなど、疑問符がつくことが多々あると聞いています。

JICA としては、小学校の教科書を全面的に入れ替える取り組みをしています。オーストラリアと共同で実施しており、日本は算数を担当しています。学年の途中で教科書のスタイルが代わるのは混乱を招くので、1 年生から順に適用しており、現時点（2020 年 3 月時点）で、2 年生まで、完了しています。

⇒（感想）
- JICA も教育の質を改善しなければならないという強い意識を持っていることが確認できました。
- ラオスの教育の問題点について、具体例をまじえて、お話くださったので、よりイメージがわきました。
- 学生研究発表では、教科書の質改善を課題にあげていましたが、算数の教科書については、2016 年 2 月より取り組まれており、とてもよい試みだと思いました。できることなら、小学校 3 年生から始まる英語教育など、他の教科においても協力できるとさらによいと思います。

（4）その他の支援

主力産業の一つである農業では、単純に栽培して出荷するだけでなく、もっと付加価値をつけていこうという取り組みをしています。ラオスでは無農薬野菜の栽培が盛んで、周辺国の富裕層の間で、無農薬野菜への関心が高まっており、こうした層に出荷を試みる動きが出ています。しかし、周辺国のスーパーに卸す場合は、関係機関に有機認定をしてもらい、量・品質を伴って、定められた日時に届けなければならないなど、生産管理が求められます。こうしたところを中心に支援をしています。

保健・医療については、医療従事者の免許制度を整備し、特に看護師の国家試験導入を支援しています。

⇒（感想）
- 無農薬野菜の栽培のお話を聞き、ラオスにとって、農業は ASEAN 域内でも競争力のある産業になりうると感じました。6 次産業化も進め、付加価値を高められるか否かが大切になると思います。
- 医師や看護師など、人の生命に関わる仕事でありながら、国家試験がなく、医学部または看護学部を卒業することで資格が得られることに大変驚きました。
- 「文献調査がメインだが、基本的な情報を抑えている。また、こうした状況でこういう課題があるという論理構成、分析がしっかりしている。非常に感心した。」とお褒めの言葉をいただき、自信になりました。

（武田　望）

【3】JETRO ビエンチャン事務所

訪問日：2020 年 3 月 6 日　応接者：所員・山田 健一郎氏

日系企業の進出をサポートする JETRO（日本貿易振興機構）ビエンチャン事務所を訪問し、ラオスの教育問題や政府の財政赤字、中国との関わり、日系企業の進出動向などについて、お話を伺いました。以下、ヒアリング内容を要約します。

（1）ラオスの教育問題

（私たちの研究発表の内容を受けて）教員や教科書の質も大事なことですが、そもそも教員が定着しないという問題があります。これは、公務員および公立の小・中学校教員の給与が低いからです。ラオスでは大卒または教員養成校卒の初任給で、月額 150~200 ドル程度と言われています。給与体系は徐々にあげられていますが、高い成長率、物価上昇率に見合っていません。以前は、給与が 3 カ月に 1 度しか支払われないことや、しばらく未払いされることさえありました。地方の僻地の学校に赴任する場合は、給与の低さに加えて、生活環境が劣悪な場合が多いため、さらに過酷な状況で、教員が都市部に逃げ帰ってしまうことが起きています。こうした事情があるため、有能な教員であれば、より条件のよい職場を求めて、私立の小・中学校などに移ります。こちらは月額 300~400 ドル程度になります。私立学校でよい教育が行われれば、それはプラス面もあるでしょうが、高所得層は少数ですので限定的です。先進 ASEAN のタイの場合は、教員の給与を大幅にあげた時期があり、待遇が改善されたと聞いています。一方、ラオスでは、教育者として優れていたとしても、生活苦にあえぐなど、将来教員になりたいと希望する者達であっても、あきらめてしまう環境があります。こうした悪循環が生まれているのです。

〔写真〕山田氏による講義の様子（2020年3月6日）

⇒（感想）
- 教員の待遇改善はラオスの教育問題を左右する大事なことだと思いました。
- タイの改善例は非常に参考になりました。
- 教育支援活動に際し、ナムさんから公立学校を特に支援してほしいと言われた意味が理解できました。

（2）ラオス政府の財政問題と中国との関係

公務員や公立学校教員の給与が低い要因として、ラオス政府の財政問題があります。2010年頃は年率 8%を超えるような成長率で勢いがあり、2015 年頃まで公共事業への投資など、財政支出が盛んに行われていました。しかし、2017 年頃から財政状態が悪化し、公共事業や職務を削減、新規採用を抑制するようになりました。それまでの公共事業は、日本の有償資金協力（円借款）のように、先進国や国際機関の融資で、実施していることが多く、大きな借金として膨れ上がっていました。2018 年度の公的債務の対 GDP 比は 57.2%と非常に高く、先進国や国際機関から融資を受けにくい状況となっており、このため融通の効きやすい中国からの援助に頼る状況が生まれています。最近では、中国の支援で昆明（中国雲南省）とビエンチャンを結ぶ高速鉄道と高速道路、ビエンチャン市内では大きな国立病院が建設中です。（私たちの研究発表に関連して）日本の支援だけでなく、並行して中国が今どのような開発支援をしているか、今後の方向性を探るのもよいでしょう。

ラオスにとって、中国は経済的結びつきが強く、影響力が大きくなっています。中国は 2000年頃から海外進出の動きを加速させ、ラオスについては、地理的に隣接する雲南省の企業が、数多くの事業を展開しています。さきほどの鉄道と道路についても、PPP（官民連携事業）という方法で、公共事業に民間企業が一部出資し、使用料等で事後に回収するというスタイルで建設しています。また、中国企業による大規模なインフラ建設の場合は、建設業やそれに付随するあらゆる業種の人々が中国から来ます。彼らは事業が終わった後もラオス国内に残り、新たなビジネスを展開するなどします。今や 20 万人以上の中国人が滞在していると言われています。また、雲南省の他に湖南省の人々も数多く居住しています。そのほとんどは湖南商人と言われる人々で、プラスチック製品や文房具など雑貨を販売したり、成功してスーパーを経営したり、不動産業を展開する人もいます。ラオス経済については、華人の存在を抜きに語れません。

⇒（感想）
- 教員の待遇は国の財政状態も絡んでいることを知り、一層深刻な問題だと感じました。
- ラオス政府が中国の経済援助に依存する事情が見えました。
- 近年の中国の対ラオス経済援助の規模は非常に大きく、その実態についても興味が湧きました。
- ビエンチャン市内を見渡すと、中国資本のショッピングモールや住宅街、中国語の看板が目立ち、中国の存在感や影響力の大きさを感じていました。中国のどの地域の人々がラオス国内で事業展開しているかなど、その内実を少し知ることができました。

（3）日系企業の進出

ラオス人にも、商売熱心な方や才能のある方はいます。JETRO が『LAOS100 ラオスの有力ビジネスパーソン 100 人』（前編 2017 年 3 月／後編 2018 年 3 月）を発行しているのでぜひご覧ください。海外に留学していた方が新しい視点でビジネスを始めたり、様々な分野で活躍している方がいます。私たち JETRO はラオスの信頼できるビジネスマンと日本企業が出会う場を設けるなどして、新しい事業を起こすサポートをしています。

日本企業は現在、160 社ほど進出しています。製造業が単独で進出するだけでなく、フランチャイズでラオス人が日本食レストランやそろばん塾を経営することがあります。日本企業が事業に必要な物資やノウハウなどを提供し、ラオス側は利益の一部をロイヤリティという形で支払います。その他共同出資で、工場をたてて、ものづくりをするようなことも増えてきています。

進出企業の業種は農業や各種製造業（縫製品、皮革製品、電子部品、玩具）など様々です。製造業については、一部例外もありますが、労働集約的産業が大部分を占めています。つまり、人手がたくさん必要で、低賃金で作るものです。企業の海外展開には、様々な考え方や戦略が絡みます。ラオスへの進出動機も同じで、中国への一極集中のリスクを避けるため、新たな投資先としてラオスを選択する企業もあれば、他国の賃金上昇に伴ってラオスに拠点を移すケースもあります。中小企業の場合だと、社長さんの判断にかかってくることもあります。ラオスを直接投資先として見た場合、内陸国である制約や人口が少なく経済的に豊かではないため、国内市場を大きなマーケットとしてあまり期待できない点などがマイナス要素としてあります。一方で、発展著しいインドシナ地域の中央に位置し、鉄道や道路などの交通インフラが整備され、周辺諸国とのアクセスが改善されつつあることから、中国やその他 ASEAN 諸国を市場として見ることができるため、プラス面も出てきています。日本企業は非常にまじめで、雇用した人々を育てるということもしますし、環境保護にも敏感で、よい印象を持たれています。ラオス政府からはもっと来てほしい、その他の国の見本になってほしいということを常々言われています。

⇒（感想）
- JETRO がどのようなサービスや役割を担っているのか、理解できました。
- 日本企業の進出と言っても、様々な形態があることがわかりました。そのいくつかの事例を知り、だいぶイメージがわきました。
- 直接投資先のプラス面とマイナス面を比較すると、やはりマイナス面が目立つので、プラス面を増やしていくことが大事です。こうした面を意識して、開発援助を考えていかなければならないと改めて思いました。
- ラオスの有力ビジネスパーソン 100 人を見ると、あらゆる分野で才能を発揮している方がおり、こうした人物が経済を牽引していくのだなと感じました。

（4）私たちの研究発表について

ラオスでは初等教育が十分でない子どもたちが多く、工場で従業員を雇用した時にはかなり苦労されているところもあります。皆さんがご指摘のように、高等教育よりも初等教育をラオス政府にはなんとかしてほしいという意見が日系企業の間でも圧倒的です。例えば、MBA（経営学修士）を目指すような人はすでに恵まれており、自身で勉強できる環境にあるでしょう。MBA を 1 人出すことに支援するよりも、できることならば初等教育に回してほしいという観点です。ただ、初等教育を支援する場合、その成果が出てくるには、時間を要しますし、成果が目立ちにくいということがあります。ある一人の大学生に多額の奨学金を支援すれば、それは当然能力がありますから、5 年後に立派になって帰ってくることになるでしょう。しかし、幼稚園や小学校全体に同じ額の支援をしたところで、なかなか成果が見えにくいという問題がありますので、難しいところです。そこが初等教育に手が回らない要因の一つでしょう。

⇒（感想）
- 私たちが初等教育支援の重要性を主張したことについて、実際に、中小企業の社長さんたちからも、そうした声が出ていることを聞き、着眼点はよかったのかなと自信になりました。一方で、成果を意識した場合に、初等教育よりも高等教育への支援に重点が置かれる事情も、なるほどと思いました。

（高井 寿彦）

【4】ドンカムサン教員養成校と附属小学校

訪問日：2020年3月5日　応接者：ラオス人の先生2名、成田 朋末先生

（1）ドンカムサン教員養成校

ラオスの教育は、就学前教育（3~5歳の3年間）、初等教育（小学校5年間）、前期中等教育（中学校4年間）、後期中等教育（高校3年間）、高等教育（大学4年間）、その他、技術教育・職業訓練校からなります。教員養成校（TTC：Teacher Training College）は、就学前及び初等教育、中等教育課程の教員を養成する機関です。その他、現職教員に対して研修で教授法を指導するなど、教育の質を改善する拠点としての役割を担っています。ドンカムサン（Dongkhamxang）教員養成校は、ラオス国内に8つある教員養成校の1つで、首都ビエンチャンにあります。1991年にTTS（Teacher Training School）として設立され、2010年にTTCとなっています。現在の学生数は986名（就学前課程が約4割、初等教育が約4割、前期中等教育が約2割）です。

〔表〕ドンカムサン教員養成校のカリキュラム

学生の種類	就学期間	プログラム	学位（degree）
中学校卒業者	3年	就学前・初等教育課程教員養成	中級（Intermediate）
高校卒業者	2年	就学前・初等、前期中等教育課程教員養成	ディプロマ（Diploma）
	4年	就学前・初等、前期中等教育課程教員養成	学士（Bachelor）

＊就学前は幼稚園や保育園、初等は小学校、前期中等は中学校、後期中等は高校にあたる。

〔写真〕ドンカムサン教員養成校でのヒアリング（2020年3月5日）

今回の訪問では、まずラオスの教育に関する制度について近年、大きく改善に向けた取り組みがなされているとの話がありました。2012年の教育の質基準の設定や小学校3年生からの英語教育開始、中等教育の教科書改訂などが例としてあげられます。また、2015年7月には『改訂教育法』が施行され、前期中等教育が3年から4年に延長され、義務化されています。教員養成について、以前は高校を卒業していれば、1年間の課程で教員資格が得られましたが、今は2年間（中卒の場合は3年間）に変更されています。また、以前の短い期間で教員資格を得た教員や無資格の教員に対しては、「アップグレード研修」を実施し、新しい資格への切り替えを行っています。

ドンカムサン教員養成校は、日本のODAプロジェクトの対象でもあります。同校の教員が来日し、教授法や生徒に考えさせる授業方法、学習指導案の書き方等の研修を受け、帰国後は教員養成校の他の教員や学生、また各地の小・中学校の教員に学んだことを普及する活動（授業やワークショップ）をしているとのことでした。なお、同校では「ラオス教員の倫理観」として、「誠実であること、仕事に愛着を持つこと、学習者を大切にすること、模範となること、自己啓発に励むこと」が掲げられていました。

〔写真〕校内で掲示される教師の倫理観（ラオス語）と和訳

【教師の倫理観】
- 誠実であること
- 仕事に愛着を持つこと
- 学習者を大切にすること
- 模範となること
- 自己啓発に励むこと

（2）ドンカムサン小学校

ドンカムサン教員養成校でのヒアリング後は、附属の小学校を訪問し、青年海外協力隊隊員として赴任されていた、成田朋未先生よりお話を伺うことができました。JICAによる「初等教育における算数学習改善プロジェクト」（協力期間：2016年2月12日~2022年3月31日）で、東京書籍㈱の協力により作成された算数の教科書が導入されているところを直に見せていただきました。これまでのラオスの教科書は、算数であるにも関わらず文章による解説が大半で、図表を用いた解説、計算の練習問題などが少なかったことが指摘されました。また、計算の練習問題にしても、必要以上に大きな桁数が用いられていることなど、小学生の指導に不適切な箇所が見られたとのことです。ドンカムサン小学校は国内のパイロット校であるため、いち早く導入され、2018年度の1年生から、日本の支援による教科書の導入が始まっています。私たちが訪問した2019年度時点で2年生までが実施され、4年生の教科書が検討されている段階です（翌2020年度は3年生まで実施、5年生の教科書が検討）。同校の4年生は2クラスあり、それまでの教科書と新しい検討段階の教科書を使用するクラスに分かれ、比較がなされていました。日本の教科書は、やはり理解しやすいと好評を得ているとのことでした。

〔写真〕教科書を見せながら解説する成田先生（右端）（2020年3月5日）

⇒（感想）
- 「ラオス教員の倫理観」は、どの業種や職種であれ、通じる部分があると思いました。
- 「学生研究発表大会」において、私たちは初等・中等教育における教科書や教員の指導書の改善について言及しましたが、小学校の算数についてはまさに進行中であることを確認しました。こうした開発協力が、今後のラオスの発展に重要な役割を果たすのだと感じました。
- 開発協力の現場で、ラオスの教育に貢献されている成田先生からお話を聞き、とても刺激を受けました。形は違えども、仕事を通じて何か国際社会に貢献できることがないか、意識していきたいと思います。

（猪俣　遼一）

【5】ラオス農林省農業局

訪問日：2020年3月3日　応接者：ラサバド氏（Mr. Salongxay Lasabud）
ヴァンシラロム氏（Ms. Viengphet Vansilalom）

ラオス農林省農業局（Ministry of Agriculture and Forestry, Department of Agriculture）計画・協力課課長のパンパディット・パンダラ氏（Mr. Phanpradith Phandara）により、訪問を受け入れていただきました（ご本人は海外出張中で不在）。今回の訪問では、ラオス農業事情と農林省の取組についてお話がありました。以下、ヒアリング内容を要約します。

（1）ラオスの農業事情

ラオスにとって、農業は重要な産業です。GDPに占める農業の割合は15.7%（2018年）で、就業人口の68.4%（2017年）が農業に従事しています。主な農作物はコメ、トウモロコシ、キャッサバ、コーヒー、ハトムギ、果樹、サトウキビなどです。特に、コメの栽培については、国内の全作付面積の約8割を占めており、ラオス農業の中心と言えます。雨季の天水稲作と乾季の灌漑稲作、高地稲作などがあります。コメの種類の多さはインドに次いで多いと言われ、もち米が主流であることが特徴です。主要な輸出品は、日本にも多く輸出しているコーヒー（生豆）や天然ゴムなどです。その他、商品作物として、でん粉肥料用のキャッサバ、飼料としてのトウモロコシ、コメなどがあります。

〔写真〕農林省専門職員による講義の様子（2020年3月3日）

（2）クリーン農業への取組

ラオス農林省は『2025年に向けた農業発展戦略及び2030年ビジョン』（2015年5月）において、「食糧安全保障の強化」、「比較優位を持った農産物の生産」、「クリーンで安全かつ持続可能な農業の発展」という目標を掲げています。近年は特に、品質と安全性の高いクリーン農業を推進しています。ラオスは山がちな国土で農業生産に適した土地が少なく、農産物を大量に生産し輸出するのは難しいからです。クリーン農業を実践し、農産物の付加価値を高めることで、輸出の拡大を目指しています。具体的には、OA（Organic Agriculture：有機栽培）とGAP（Good Agricultural Practice：農業生産工程管理）という栽培基準での農業です。OAは農薬や化学肥料などを一切使用しないもので、GAPは減農薬農法や有機農法を導入したものです。両者とも、政府や国際機関から認証を受けるためには、様々なガイドラインに沿って、農業生産の工程を管理しなければなりません。非常に厳しい審査があるため簡単ではありませんが、認証が受けられると、品質・安全性の高い農産物であることが証明され、価値が高まります。

GAP認証農法への農林省の取組は、2012年からJICAの支援を受けて始まりました。輸出向け栽培を行っている水田稲作農家に対して、支援しています。具体的には、農林省の専門職員を地方政府に派遣し、農業政策に携わる職員に対して講習会を開き、GAP認証農法への知識を身に付けさせます。その後、個別の農家への指導を行います。意欲的な農家を発掘し、優秀な者をリーダーとして、その下に数十戸の農家を一つのグループとして、GAP認証農法に取り組む体制づくりを行っています。このような体制はまず、中部のサバナケット県とカムムアン県の水田稲作農業の先進地で開始し、徐々に周辺地域に拡大させます。GAPの取り組み農家は300戸（2017年時点）で、認定面積は1200ヘクタールです。年平均生産量は2658トンです。今後、OAやGAPに取り組む農家を増加させ、生産量を拡大したいと考えています。

ラオスの農業はもともと化学肥料や農薬の使用が少なく、北部では焼き畑などに代表される有機農業が主流で、課題は環境と有機農業の両立でした。有機肥料の生産や有機農業のための技術支援・資金支援が拡大されれば、ラオスの有機農業に潜在力はあると考えています。

ラオスのGAP認証基準はこれまで、ASEANが定める「ASEAN・GAP」と基準が異なっていましたが、適合させる努力をしています。このためには食品の安全、生産物の品質、環境管理、社会的福祉の4つの項目で基準を満たさなければなりません。例えば、農薬に過度に依存しない病虫害への対応、有機肥料の自家生産、水質汚染防止措置などです。これらをクリアするためには、科学的な知識が必要であるため、指導する技術者や資格を持った認定者の育成が急務となっています。認証が得られれば、ASEAN加盟国域内で自由に農作物を輸出することが可能になりますので、こうした面に期待しています。

⇒（感想）

- ラオス政府の中枢で政策を担っている方から直にお話を伺うことができ、貴重な体験となりました。
- 国内でどのようにクリーン農業を普及させようとしているか、中央政府と地方政府、そして一般農家との連携など具体的な部分を知り、政策が実行へと移る様がイメージできました。
- 後発途上国の開発を考える場合、アジア NIES 型の外資誘致からの工業化をイメージしていましたが、農業の高付加価値化も経済を牽引する鍵となりうる可能性を感じました。
- ラオスでのクリーン農業の普及に JICA による技術指導があるなど、日本の貢献があることを知り、誇りに思いました。

（小坪 唯人）

＊指導教員より

以上が、ラオス開発研究の検証となります。ゼミ生は学内での研究において、日本政府がラオスへの開発協力を今後どう展開すべきかを考察し、初等・中等教育およびソフト面での支援強化を訴えました。論理構成はしっかりしていましたし、ラオスの開発にとって重要な道筋を示唆していました。今回の研修では、実際にラオスに足を踏み入れ、研究と関連する機関や教育現場を訪問したことで、その論旨に手応えを感じた部分もあれば、新しい発見、反省点もありました。これにより、彼らの開発研究に深みが増したと思います。卒業後、途上国の開発に直接携わらないにしても、こうした国際情勢や社会問題に関心を持ち続け、その解決や解消のために何が必要かを常々考えられる社会人になってもらいたいです。

次節では、研修参加者が本学での学生生活を振り返った寄稿を掲載します。特に、これから大学への進学を考える高校生の皆さん、ゼミ選択を控える本学1・2年次生の皆さんに、目を通していただけましたら幸いです。

（内山 怜和）

4．桃大・国際体験記

【1】海外研修への挑戦とラオス開発研究

2019年度卒（内山ゼミ3期生）
伊藤 和輝

（1）「BSP中国・香港」と「経済学部ABCP・マレーシア」

海外研修とゼミを通じて、私は大きく成長できたと感じています。海外研修については、1年次は「BSP（Beginning Step Program）中国・香港」（2016年度）に、2年次は「経済学部ABCP（Asia Business Career Program）・マレーシア」（2017年度）に一般学生として参加し、3年次には「BSP中国・香港」（2018年度）でメンター（1年次生指導役）を務めました。

①「BSP中国・香港」（2017年3月7日~3月16日）

「BSP中国・香港」は1年次生対象の海外研修で、10日間かけて中国の広州、香港の2地域を視察します。在広州日本国総領事館やJETRO広州事務所、同香港事務所などの日本の政府系機関や日清食品（広州）、但馬屋（香港）といった日系企業を訪問し、中国の一国二制度や各地域の経済状況、各企業の事業展開について学びました。華南理工大学との学生交流では、お互いの国のことや関心事を紹介しあったり、日々の学生生活について話をすることで、親睦を深めました（2年後にメンターとして同大学を再び訪問した際、彼らと感動の再会を果たしました）。その他、香港の高層ビルが所狭しと立ち並ぶ光景や大勢の人々で賑わう繁華街が印象的でした。この研修に参加したことで、1年次の段階で海外との距離が縮まり、その後の学修につながります。

〔写真〕ヴィクトリア・ハーバーを背景に（2017年3月13日）

②「経済学部ABCP・マレーシア」（2018年2月8日~3月15日）

次のステップとして、2年次には「経済学部ABCP」に参加しました。これは英語の語学力を高めながらアジア経済を学ぶ研修です。研修先はマレーシアで、4週間の英語研修の他、文化研修、エクスカーション、企業訪問等で構成されています。事前・事後（秋学期・春学期）には英語とアジア経済関連の講義を受講するため、およそ1年におよぶプログラムです。

英語研修は首都・クアラルンプール郊外のUCSI Collegeで行われました。午前中はレベルごとに別けられたクラスで様々な国籍の留学生と一緒に受講し、午後は桃大生のみのクラスとなります。すべて英語でのやりとりであり、ディスカッションやプレゼンテーションを行う機会が多く、リスニング力やスピーキング力が磨かれました。

〔写真〕UCSI Collegeでの修了式（2018年3月13日）

一方、5週間のマレーシア滞在を通じて、現地の特殊な社会環境や人々の生活の様子を肌で感じることができました。マレーシアはブミプトラ系（マレー系＋その他原住民）、華人系、インド系の民族がおよそ6：3：1の比率で共存する社会で、街では公用語のマレーシア語だけでなく、英語、華語、タミール語など様々な言語が飛び交っています。また、各民族が主に信仰する宗教はイスラム教、仏教、ヒンドゥー教で、それぞれ戒律が異なります。特にイスラム教徒は、1日5回の礼拝が義務付けられており、工場、店舗、駅構内など、街のいたる箇所に、プレイ・ルーム（お祈りの部屋）が設けられています。大型ショッピングモールでは、イスラム教徒が飲食を禁じられている豚肉やアルコール類などが通常の食品売り場になく、ノン・ハラル（許されないもの）コーナーで非イスラム教徒のために販売されています。日本とは大きく異なるその特徴に驚くとともに、日系企業が海外で事業を展開する際に、現地の事情や特性を把握する大切さを改めて認識しました。その他、クアラルンプール中心部の賑わいや、地下鉄・モノレールなど都市交通の建設が進む状況を観察し、同国の経済発展の度合いを直に感じることができました。この研修を通して、マレーシアについて様々な角度から学修することができ、アジア経済を学ぶ楽しさに引き込まれていきました。そして3年次からは、この研修の引率者であった内山先生のゼミに入り、アジア経済を専攻することになります。

（2）内山ゼミでのラオス開発研究

①ラオスに着目した経緯

内山ゼミでは、東南アジアの後発国、カンボジアとラオスに着目しました。これから開発が特に必要とされる国を研究することに興味が湧いたからです。そして、「桃山祭」で「東南アジアのすゝめ」を開催するにあたり、沢田誠二先生からラオスの教育事情についてお話を聞き、満足な環境で勉強できない子どもたちがたくさんいることを知りました。1学年上の先輩が始めたラオス教育支援のための募金活動に意義を感じ、私自身も一生懸命に取り組みました。

②「学生研究発表大会」への挑戦

4年次の学生研究発表大会（2019年度）では、ラオスの開発の方向性を探るべく研究しました。内山先生からは、「主張を明確に」、「報告の論理構成をしっかりするように」、「外務省の専門官になったつもりで支援のあり方を考えるように」といったアドバイスを受けました。何を主張すべきかすぐには見えてきませんでしたが、ラオスの経済状況を分析することから始まり、日本政府がこれまでに行ったラオス支援を徹底的に調べたり、今後のラオス経済にとって何が課題となるかを考察するなかで、だんだんと見えてきました。内山先生のご指導や沢田先生、ナムさんのご協力を得て、最終的には納得のいく研究発表ができました。最高位

〔写真〕「学生研究発表大会」本選後の記念撮影（2020年1月11日）

の学長賞を受賞できたときは、うれしくて言葉になりませんでした。研究メンバーの4人は、3年次の第2回「東南アジアのすゝめ」（2018年度）に取り組んでいたときから、支え合ってきた仲間であり、研究発表に向けては、頻繁にミーティングし、一緒に調べものをしたり、発表内容についての議論を重ねました。午前11時に集まり、打ち合わせを終えたのが、20時という時もありました。それだけに、4人で喜びを分かち合えたことは、最高の思い出です。また、研究発表の主張として、日本政府の初等・中等教育への支援の重要性を訴えたのですが、JICAラオス事務所やJETROビエンチャン事務所の専門家の方に、「主張はそのとおりだ」、「よくできている」と褒めてもらえたことも、すごくうれしかったです。

③「ラオス研修」での気づき

ただラオス訪問前は、研究を進めるうえで少し引っかかる部分がありました。それは私自身が「ラオスについて知っているようで、知らないのではないか」という気持ちでした。先生方からお話を伺ったり、政府の報告書など資料で調べたものの、ラオスを訪問したことがないため、実感が湧かなかったのです。私はこれまでの海外研修の経験で、現地に赴き自分の肌で感じることの重要性を認識していました。現地の人々とコミュニケーションをとり、触れ合うことで理解できる国民性や気質があることを知っていたからです。そこで、研究メンバーと相談の上、皆で内山先生に引率を依頼し、この研修を実現しました。

現地では、ビエンチャンの街並みや日本のODAで建設された道路や空港、タート・ルアンやパトゥーサイといった歴史・文化の象徴などを見学しました。その他、ラオス特有のもち米やピン・パー（メコン川の魚料理）を食べたり、特産のコーヒーを飲んだり、子どもたちと会話やサッカー通じ交流したこと、交通量をクラクションや排気ガスで感じるなど、五感を使ってラオスを体験することができました。

実際にラオスに足を踏み入れたことで、新しい気づきが数多くありました。特に私が驚いたのは交流した小・中学生の間で、SNSが想像以上に普及していた点でした。FacebookやTwitterはもちろんのこと、Instagramまで浸透していました。ラオスは低開発にあえいでいる印象が強かったので、とても意外でした。道路などインフラ面で遅れていると感じる部分がある一方で、すごく進んでいる部分もあり、とても興味深かったです。

〔写真〕ナコンファン中学生との交流の様子（2020年3月4日）

研修での経験は、学生時代の財産です。本当にこの研修に参加できてよかったと心から思います。本報告書をご覧になった後輩の皆さんに、その重要性を感じていただけると幸いです。

最後に内山先生、本研修に共に参加したメンバー、これまでのラオス研究活動で出会った方々に厚く御礼申し上げます。

【2】ナコンファン中学生との交流と開発研究

2019年度卒（内山ゼミ3期生）
猪俣 遼一

（1）初めてのラオス教育支援

ゼミ所属前、私にとってラオスは縁遠い国で、詳しくは知りませんでした。ゼミに入ると、専門とする国を一つ選択するのですが、東南アジアのどの国にするか、決めあぐねていました。内山先生から「これといった国がなければ、ゼミと関わりの深いラオスを勉強してみたらどうか」と勧められ、担当国にしたのが始まりです。以後、歴史や経済的特徴、日本との関係性、人々の生活習慣など専門的に学修するようになり、徐々に身近な国へと変わっていきました。3年次の第2回「東南アジアのすゝめ」（2018年度）では、ラオスの小・中学校への支援物資に添える手紙執筆の担当者になりました。重圧を感じましたが、支援物資贈呈の経緯やゼミの皆の思いがうまく伝わるように心を込めて取り組みました。私たちに代わって、支援物資を届けてくださったDEFC代表の松本卓朗さんが送ってくれた写真に、子どもたちの満面の笑顔があり、とてもうれしくなりました（18ページ参照）。また、ゼミ単位の小さな活動が遠い異国の子どもたちの役に立てたことに、アイディアと行動力次第で、可能性は無限に広がることを感じました。

（2）ナコンファン小・中学校での思い出

今回の「ラオス研修」は、第3回「東南アジアのすゝめ」（2019年度）で集まったラオス教育支援の募金を活用し、子どもたちに物資を直接届けることが一番の目的でした。これを実現したナコンファン小・中学校での一日は、夢のような時間でした（21~25ページ参照）。高井くんの大学・ゼミ紹介とともに、支援物資を贈呈する際、生徒の皆さんからは大きな歓声と拍手をいただくことができました。現地で組み立てたサッカーゴールには、子どもたちが一斉に集まり、大喜びでした。私が担当した音楽教室では、熱心に「カエルの歌」に挑戦してくれました。そして何より、子どもたちが私たちを歓迎し、興味を持ってくれたことがうれしかったです。

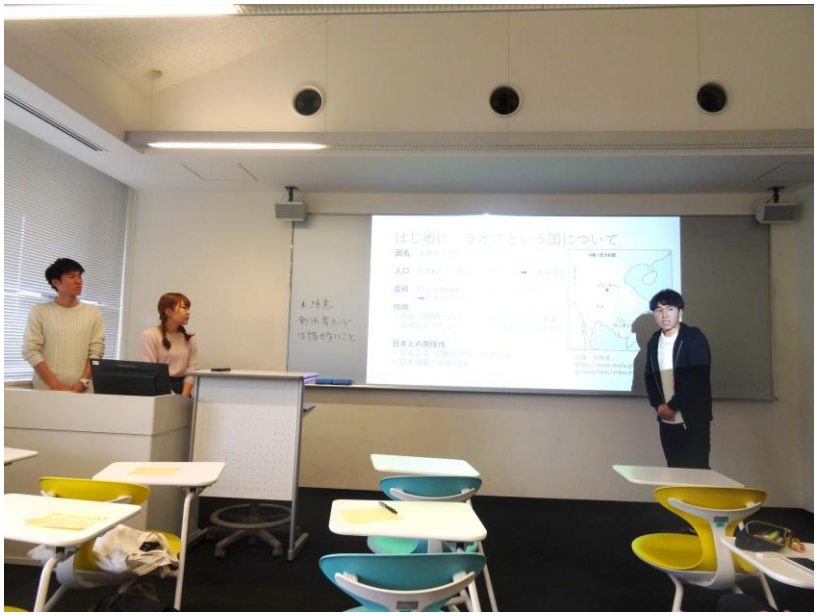
中でも印象深かったのは、サッカー教室の合間に、けん玉やバドミントンを通じて仲良くなった女子生徒が、一冊の本を私にプレゼントしてくれたことです。驚いたことに、その本は私たちもよく知る漫画、諫山創『進撃の巨人』（講談社）で、すべて日本語で書かれたものでした。彼女はこの漫画が大好きで、分からない日本語は逐一スマートフォンで検索しながら少しずつ読んでいるとのことでした。彼女は勉強している日本語が通じることが嬉しいようで、知って

〔写真〕交流したナコンファン中学生との記念撮影（2020年3月4日）

いる言葉で何度も話しかけてくれました。私はお返しに、日本のことわざと英訳が併記された辞典を彼女にプレゼントしました。お互いの国に興味を持ち、好きになる心の交流ができたように感じます。

（3）「学生研究発表大会」での学び

「学生研究発表大会」（2019年度）に挑戦したことも、学生生活で思い出深いことの一つです。12月の予選を通過した数日後、予選のビデオで検討会をしました。発表には自信があったので、内山先生からは褒めていただけるかと思いきや、「ここはよいけれど、ここは全然だめだな」という具合に、説明のまずかった部分を指摘されました。また、その箇所をビデオで何度も見返して、「なぜだめだと思う？」と発表メンバー皆で考えさせられました。自分自身の至らないところに気づくのも学ぶ面白さでした。一方で、「本選に向けて1カ月間さらにがんばれば、かなり質の高い発表が期待できる」と言われ、その気になってがんばりました。その後も発表メンバーで何度も集まり、改善を重ねた結果、本選では予選時の発表を大きくレベルアップさせることができました。取り組んでいる期間は苦しかったですが、今となってはそれもよき思い出です。



〔写真〕「学生研究発表大会」予選時の発表の様子（2019年12月7日）

（4）開発協力の現場視察

ゼミの研究では、ラオスの開発をテーマに取り組み、これに関する様々な文献を読みました。日本政府の対ラオスODAのこれまでの経緯やプロジェクトごとの背景や目的、成果が書かれた報告書などです。これらにより、開発協力がどのようなものか、イメージは膨らみました。日本国内で文献を読み込むだけでは、やはり実際のところがどうなのかという感覚は乏しいものがありました。しかし今回の研修で、ODAプロジェクトを直に見学したり、支援に携わっている方々のお話を聞くことができました。そこには文化の違いや支援先との温度差といった様々な苦労があり、それを乗り越えた上でようやく、支援を行えるという、国境を跨いだ関係づくりの難しさを垣間見ることができました。

【３】全力を注いだ内山ゼミでの活動

2019年度卒（内山ゼミ3期生）
高井 寿彦

（１）ゼミ所属のきっかけ

桃大経済学部では、2年次（2017年度）の春学期に「コース導入講義」という授業があります（2018年度から1年次秋学期に変更）。各回、経済学部の先生方が交代でゲスト講師として出講し、自身の研究分野やゼミ活動について紹介します。私はそれまで、経済学でもどの分野を専攻するか決まっていなかったのですが、この講義を受講する中で、日本と東アジア・東南アジア諸国との経済的関係性に興味を持つようになりました。また、講義の担当が内山先生だった縁で、内山ゼミを希望することになります。

（２）インドネシアについての学修

ゼミで専門的に学修する対象国は、インドネシアを選択しました。世界第4位の人口規模を持ち、世界最大のイスラム教国である同国に一目置いていたからです。同じ担当国のゼミ生は他に1名だけで、発表は二人三脚で取り組みました。ゼミの序盤は一般概況や歴史について扱うのですが、徐々に貿易や直接投資、日本のODAなど、経済色の濃いテーマになります。特にインドネシア進出の日系企業で、成功を収めている事例を調べたことが印象に残っています。現地での販売には日本国内とは事情が異なるため、様々な創意工夫が必要とされます。フマキラー社の蚊取り線香やユニ・チャーム社の赤ちゃん用紙おむつ・女性用生理用品など、進出当初はなかなか現地の人々に受け入れられなかったけれども、販売戦略や製品開発・改良により、成功を収めていった経緯など、とても勉強になりました。

（３）「東南アジアのすゝめ」開催

第2回「東南アジアのすゝめ」（2018年度）では、ゼミ長の伊藤くんや展示会責任者の武田さん、ラオス班の猪俣くんとともに、中心メンバーとなって活動しました。インドネシアの資料やクイズ問題の作成と並行して、展示会に必要なポスターやチラシ作り、民族衣装の外部からの借用等、一生懸命に取り組みました。開催期間中は、「東南アジア・クイズ大会」の司会を誰よりも数多く担当しました。来場者の子どもから大人まで、大勢の方々に楽しんでもらえたことがとてもうれしかったです。正解発表時に問題に関する東南アジア事情を解説

〔写真〕東南アジア・クイズ大会の様子（2018年11月17日）

すると、かばんからノートと鉛筆を取り出してメモをする小学生がおり、感心したことも印象に残っています。この展示会は、東南アジア諸国の魅力を来場者に伝えることや、ラオス教育支援活動を展開することが大きな目的ですが、私たちにとっては日頃の学修の成果を示す場でもあります。来場者に担当国のインドネシアの解説をする際は、普段以上に緊張感をもって話すことになりました。うまく説明できない箇所は、自分自身の理解が浅いところと認識することができ、復習にもつながりました。翌年の第3回「東南アジアのすゝめ」（2019年度）では、後輩3年次生の指導役を務め、来場者への対応やクイズ大会を盛り上げるポイントなどをアドバイスしました。ゼミの学年を越えた交流ができたことも一つの成果でした。

（4）「ラオス研修」でのプレゼン

「東南アジアのすゝめ」での寄付金を活用し、ラオスの小・中学校に直接、支援物資を届けることは、これまでに実現できていなかったので、今年こそはという思いで、ゼミの皆とラオス渡航を企画しました。最終的に3期生ゼミ中心メンバーであった4人に、4期生ゼミ長の小坪くんが加わり、内山先生のご協力の下、研修という形で本格的に動き出すことになりました。ラオスの子どもたちに何をどれだけ購入し贈呈するとよいか、研修メンバーの皆で話し合うときは、子どもたちの喜ぶ姿が目に浮かび、ワクワクしました。日本国内で買い出しをしたり、大阪紹介のために市内を視察したり、一つ一つの活動がよい思い出です。ナコンファン小・中学校の皆さんに、支援物資を贈呈したり、授業およびサッカー教室を開催できたことは、最高の思い出です。学生生活4年間の最後の最後まで、充実したゼミ活動を送ることができました。

〔写真〕ナコンファン小・中学校での桃大紹介の様子（2020年3月4日）

（5）その他の活動

ゼミでは、東南アジア経済について学修するだけでなく、内山先生のご指導の下、フットサルでの交流会や懇親会（夕食会や飲み会）などが盛んに開催されました。私は副ゼミ長として、これらの企画・開催を中心となって進めました。ゼミの一体感を高めるにはこうした活動は不可欠ですし、これに貢献できたことは、自信になりました。卒業後の進路、業種は様々ですが、これからもゼミ仲間を大切にし、何か困ったときはお互いに助けあっていきたいと思います。

【4】桃山祭実行委員会と内山ゼミ

2019年度卒（内山ゼミ3期生）
武田　望

（1）桃山祭実行委員会での活動

学生生活4年間を振り返ると、思い出深いことはたくさんありますが、桃山祭実行委員会と内山ゼミでの活動が特に印象に残っています。

「桃山祭」は桃大の代表的イベントの一つで、2019年度で第59回目を迎えるなど伝統があります。実行委員会はこれを運営する学生団体（文化系部活）で、具体的には会場の設営や各種イベントの企画、ゼミや部活・サークルの模擬店、屋内展示会、地域の方々によるバザーの管理、著名人の招聘・講演会開催など、活動は多岐にわたります。委員は80名ほどで、イベント局、事務局、外交局、財務局、広報局、整美局で構成されています。私は1年次と2年次（2017年度・2018年度）の2年間、この委員会に所属し、整美局の一員として活動しました（3年次以降はOGとなる）。役割としては、アンデレ広場（大学構内）のイベント用ステージの設営、北門のゲートや案内看板の作成、来場者への会場案内、催し物をする団体にルール違反がないかのチェック、指定場所以外での喫煙などマナー違反者への注意などを担当しました。開催期間中は大勢の来場者が集まるため（例年1万4000人ほど）、事前に様々なトラブルを想定し予行演習を行い備えます（準備期間は7カ月ほど）。慣れないゲートづくりや来場者を惹きつけるための看板作成に試行錯誤したことは今でもよく覚えています。皆がそれぞれの役割を果たし、心を一つにして、大きなイベントを開催、成功に導くという過程が、私にとってとても貴重な経験となりました。

〔写真〕北門に作成したゲート前での記念撮影（2017年11月17日）

（2）内山ゼミでの活動　―ゼミで培った仲間との絆―

①第2回「東南アジアのすゝめ」について

内山ゼミは、2年次に桃山祭実行委員会で活動している際、第1回「東南アジアのすゝめ」（2017年度）の開催を知り、興味を持ちました。また、海外研修である「BSP中国・香港」（2016年度）を経て、アジア経済を学修したいと思ったことも希望した理由の一つです。3年次になりゼミに所属すると、海外研修経験者やアジア経済に関心の高い人が多く、すぐに仲良くなることができました。第2回「東南アジアのすゝめ」（2018年度）の開催にあたって、内山先生から「桃山祭実行委員の経験を活かしてほしい」とゼミの展示会責任者に指名されました。責任ある役割を果たせるよう、一生懸命に取り組もうと思いました。どのような企

画をすれば来場者が興味を持つかや、どのように東南アジア諸国の魅力を伝えるか、ラオス教育支援への理解を求めるか、幅広い年齢層に対応するかなど、様々な角度から議論しました。企画内容が定まってきたら、各国紹介のための資料やクイズ問題の作成など、班（国別）ごとに役割を担い、計画的に進めていきました。その他、桃山祭実行委員会に対し企画を説明して実施の可否を確認したり、必要な備品の買い出し、大きな案内看板の作成など、やらなければならないことは無数にありました。週に1度のゼミの時間ではとても足りないため、ゼミ後に居残りをしたり、ゼミとは別の日に集まって作業を進めました。展示会開催中は、初日に来場者が少なかったため、急遽ゼミのメンバーで話し合い、チラシを増刷、ダンボールで簡易な案内板を作成し、皆で手分けし声掛けして学内を周るなど対処しました。

〔写真〕第2回「東南アジアのすゝめ」での様子（2018年11月16日）

展示会には地域のお子さんを連れたご家族やご夫婦、小学校の先生と生徒たち、桃大の先生方や卒業生、同学年の友人など、いろいろな方々が足を運んでくれました。真剣に展示資料を読んでくださり、「よくがんばってるね」、「面白かったよ。来年も開催してね」、「今度旅行する際に参考にするよ」などと声をかけてくださる方もいました。展示会の準備や開催期間中は大変でしたが、皆さんが楽しんでいる様子を見て、本当に実施してよかったなと思いました。ラオス教育支援のための募金活動では、大勢の方がご協力くださり、2万7410円が集まり、DEFCを通じて、ラオスの小・中学校に学用品を届けました。DEFC代表の松本卓朗さんから、現地の子どもたちが喜ぶ様子の写真を受け取ったときは、ゼミ内で自然と拍手が起こり、とても感動しました（詳細は18ページ参照）。

②ゼミ仲間との様々な挑戦

「東南アジアのすゝめ」の活動を通じて、ゼミ全体としての仲間意識が強くなりました。なかでも、伊藤くん、猪俣くん、高井くんとは、一緒に多くの困難や課題を克服してきたため、何でも相談できる親しい間柄になりました。4年次の秋学期には、「学生研究発表大会」（2019年度）に出場し、さらにラオスを訪問して教育支援活動を展開するなど、様々なことに挑戦しました。ラオスの開発に何が必要かを議論したり、子どもたちに何をしたら喜んでもらえるかを一緒に考える時間がとても楽しかったです。

〔写真〕「学生研究発表大会」に向けた準備の様子（2019年12月26日）

③カンボジア・ベトナム・タイへの渡航

最後に、東南アジアへの個人旅行についても紹介します。内山ゼミでは、一人ひとりが専門とする国、担当国を持ちます。私の場合は、カンボジアでした。同国の内戦（1970~1991年）や経済の近況、投資環境、日系企業の進出動向などをテーマに、班のメンバー（3名）で調べて、ゼミ内で発表しました。第2回「東南アジアのすゝめ」では、カンボジアの展示コーナーを担当しました。こうした学修を通して、東南アジアを訪問したいと思うようになりました。3年次の春期休暇中にはカンボジア・ベトナム（2019年1月20日~25日）に、4年次の春期休暇中（「ラオス研修」の2週間前）にはタイ（2020年2月19日~22日）を、他大学の友人と訪ねました。前者ではアンコール遺跡群とハロン湾、後者ではバンコクの寺院や水上マーケット、マハナコンタワー等を見学するなど、観光がメインでしたが、市街地や人々の生活を目の当たりにして、ゼミで学んだことを体感できました。

東南アジア諸国についての学修、ゼミ活動に夢中で取り組んだことは、学生時代の一番の思い出です。そして、ともに力を合わせて活動してきたゼミの友人は、これからも大切な仲間です。

〔写真〕タイ・バンコクのワット・アルンにて（2020年2月20日）

【5】サッカー一筋から東南アジア専攻へ

2020年度卒・予定（内山ゼミ4期生）
小坪 唯人

（1）東南アジア専攻のきっかけ

私は幼い頃からサッカーに一心不乱に打ち込んできました。鹿児島城西高校時代は県の選手権大会で優勝し、全国大会のピッチにも立ちました。しかし、桃大進学後はサッカー部に所属しませんでした。大学ではいろんなことに挑戦し、視野を広げたいと考えたからです。そんななか、入学して最初のゼミである「入門演習」の担当が内山先生でした。授業の中で、アジア諸国の将来性やアジア関連の海外研修について話があり、興味がわきました。これをきっかけに、海外研修では1年次に「BSPベトナム」（2017年度）に、2年次には「経済学部ABCP・タイ」（2018年度）に参加しました。さらに3年次からは内山ゼミ「演習Ⅲ」に所属し、東南アジアおよびラオス経済について本格的に学修することになります。

（2）「BSPベトナム」（2017年8月29日~9月8日）

「BSPベトナム」では首都・ハノイとホーチミンに5日間ずつ滞在し、在外公館や日系企業への訪問、ベトナム戦争関連の地視察、現地の大学生との交流などを通じて、ベトナムの経済・社会・歴史、日本とのかかわりを学びます。私にとって初めての海外渡航で、すべてが新鮮な体験でした。特に印象に残っているのは、現地に進出している日系企業の社長さんから、企業精神や経営理念、進出の経緯、現地の人々のニーズに合わせた戦略などのお話を伺ったことです。工場見学の際には、様々な化学薬品を扱っている現場（日華ベトナム社）や、1000人の人手に匹敵する機械化、4万もの素材を扱う自動倉庫（YKKベトナム社）などを目の当たりにし、その企業努力とスケールの大きさに衝撃を受けました。また、ベトナム戦争については、戦争証跡博物館やクチの地下トンネル（南ベトナム解放民族戦線の拠点の一つ）を視察して、戦争当時の悲惨な様子や近代兵器でまさる米軍に知恵と工夫で立ち向かうベトナム人の気概を学ぶことができました。

〔写真〕ベトナム・貿易大学との交流（2017年8月30日）

（3）「経済学部ABCP・タイ」（2019年2月1日~3月8日）

「経済学部ABCP」は、私が参加した2018年度より、研修先がマレーシアからタイに変更となっています。現地研修はチェンマイ大学での4週間の英語研修に加え、文化研修やエクスカーション、在外公館、日系企業訪問等で構成されています。私は自身の英語力を向上させ

ること、タイの社会や経済を観察することを目的に参加しました。英語研修では、チェンマイ大学の正課の英語クラスでタイ人の学生と一緒の授業や、桃大生のみが対象の授業を受けました。英文読解や文法についての解説をはじめディスカッション、プレゼン、洋楽を聴いてのリスニング、劇やゲームと、様々な形式の授業がありました。ときにはマンツーマンの指導があり、素晴らしい環境で英語を学ぶことができました。そのほか、文化研修としてタイ語の授業や調理実習（タイ料理）、モンクチャット（僧侶との座談会）、伝統舞踊・楽器の演奏などがあり、タイ文化にも触れることができました。企業訪問では、タイ国内の即席麺市場のシェア50%以上を占めるタイ・プレジデント・フード社やパン・スイーツを製造・販売するプンノイ・ベーカリー社、養蜂農家を訪問しました。製造工程には日本の技術や知識が活かされていることや、現地の人々の好みにあわせた工夫、世界市場に目を向けたビジョンを知ることができました。バンコクの日本国大使館訪問で、当時8年ぶりの総選挙開催の直前で、各政党の立場や選挙の構図を伺ったり、「中所得国の罠」からの脱却を図ろうとする政府の戦略などについて知ることができました。

〔写真〕タイ・チェンマイ大学での英語の授業（2019年2月4日）

（4）内山ゼミ「ラオス研修」

3年次からの内山ゼミでは、まず専門的に学修する国を決めます。ゼミとの深い関わりがあることや、その発展可能性を探りたいということから、ラオスを選択しました。またゼミ長を任され、第3回「東南アジアのすゝめ」（2019年度）を主導する役割を担いました。そして4年次生の先輩方とは、合同ゼミや展示会でサポートいただいたりする中で親しくなり、一緒にラオスへの渡航を企画することになります。

ラオスのことを調べる中で、多くの問題点や課題があることを知りました。その中の１つが教育水準の低さでした。今回の教育支援活動において、現地の子どもたちとサッカーを通じて交流し、少しでも力になれたと思うと達成感があります（詳細は24ページ参照）。高校までのサッカー経験を活かせたことは本当にうれしかったです。教員養成校訪問の際には、古い教科書と日本のODA支援で新しく導入された教科書を見比べて、ラオスの教育環境がまさに改善されつつある状況を目の当たりにできました。JICAとJETROでのヒアリングでは、それまでよい面ばかりだと思っていた水力発電事業が雇用をあまり生み出さないことや政府の財政事情から教員の給料が安く、質の高い人材を確保できていない点など、初めて気づかされることが多くありました。その他、寺院や凱旋門などの歴史的建造物を見学したり、街なかを散策して、ラオス社会の雰囲気や文化の特性を直に感じました。ネットで様々なことが調べられる時代だから省略されがちですが、現地に足を運んで体感することの重要性を再認識しました。

（5）タイ訪問

①チェンマイ大学の旧友との再会

研修最終日（3月6日）に内山先生や他のメンバーと別れ、翌日に一人、ビエンチャンからタイ北部のチェンマイに移動しました。「経済学部ABCP・タイ」で過ごした地に、1年ぶりの再訪となります。同地には4日間の滞在で、以前交流のあったチェンマイ大学の友人3名（ウェンウェンさん、ファフェンさん、プロイさん）と旧交を温めました。研修後どのように過ごしていたかや卒業後の進路、お互いの国の最新事情について語り合いました。また、自宅への招待、フイトゥンタオ貯水池への案内など、とても親切にもてなしていただきました。

ウェンウェンさんはYou Tube番組「美雲 Mikumoチャンネル」を運営しており、その中で日本語学習教材の動画を作成しています。単語と例文紹介という日本語単語帳のような趣旨の動画で、工夫が凝らされ楽しく学べる教材になっています。急遽依頼され、私も出演しました。少し照れくさかったですが、タイの友人の力になることができてよかったです。下記のリンクより、ぜひご覧ください。

〔写真〕「美雲 Mikumoチャンネル」出演時の様子（2020年3月8日）

○美雲 Mikumo チャンネル（You Tube）：Mikumo Japanese – Thai Classroom
https://www.youtube.com/watch?v=wJiuU6XyqDA
https://www.youtube.com/watch?v=ECDAUZbesDI&feature=youtu.be&fbclid=IwAR05pEjWwM5TPixt2yDZRYKvB5T9BT6j7Rlgy-oFg-WY9P8x8YhZX8W6SV0

②「経済学部ABCP」2019年度生を激励

チェンマイの旧市街地において、「経済学部ABCP」で研修中の2019年度生（桃大生）に思いがけず遭遇しました。彼らとは一度、学内で前年度ABCPの経験を踏まえてアドバイスしたり、交流する機会がありましたので、顔見知りでした。研修中で奮闘している彼らを食事に誘い、激励しました。

〔写真〕「経済学部ABCP」2019年度生との記念撮影（同上）

ベトナム、タイ、ラオスでの3つの海外研修を通して、それぞれの国で発展段階や抱えている経済・社会問題に違いがあり、東南アジア研究の面白さ・奥深さを知ることができました。入学前はサッカー一筋だった私が、国際的視野に立って物事を考えられるようになったと思います。最後になりますが、私たちゼミ生の要望を聞いてくれて最大限にサポートしてくれた内山先生や、訪問を受け入れてくださった現地の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

むすびにかえて

経済学部講師　内山 怜和

第1回「東南アジアのすゝめ」（2017年度）に始まる「ラオス教育支援活動」は、当初から一連の流れを想定していたわけではありません。その時々指導するゼミ生と向き合い、何をどう展開するか話し合い、行動を重ねてきた結果、形になったものです。この過程でゼミ生同士の意見が衝突したり、取り組む姿勢に温度差があるなど、うまくいかないことは多々ありました。しかし、様々な困難をともに乗り越えることで、ゼミ内に強い仲間意識や連帯感が生まれたように思います。

「ラオス研修」に参加した5名は、ゼミでの学修を重視し、本当によくがんばりました。「展示会の開催」、「後発途上国への支援」、「後発途上国の開発研究」をテーマに、彼らは目標を掲げ、その達成のために何が必要となるか、何をすべきかを考え、一つ一つ課題をクリアしてきました。こうした経験は、社会に出てからも活きてくることでしょう。今後も、様々な苦難が彼らを待ち受けていることと思いますが、跳ね返してくれると期待しています。

ゼミ単位での海外研修は、指導教員がいくら熱心であっても、意欲のある学生がいなければ、実現できません。今回の「ラオス研修」は彼らだからこそ実施できました。この先、当ゼミには後輩に当たる学生が次々と所属しますが、意欲ある学生とまた出会えることが楽しみです。将来のゼミ生には、先輩方の活動を受け継ぎつつ、新たな展開を模索してほしいです。

最後に、この活動を全面的にサポートしてくださったDEFCの沢田誠二先生、当ゼミ2期生のナムさん、私たちの訪問を受け入れてくださった関係機関の皆様に、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

＊新型コロナウイルス感染症禍での研修実施の判断について

「ラオス研修」実施の2020年3月初旬は、世界で新型コロナウイルス感染症の感染拡大が深刻になっており、日本国内でも警戒が高まっていたタイミングでした。出発前日の3月1日時点で国内感染者数は221名という状況で、研修を実施するか、中止するか、難しい判断を迫られました。研修先のラオスでは当時、感染者がゼロであり、現地滞在者からの状況報告に鑑みて、実施の決断をいたしました。ゼミ生5名のラオス渡航への強い意志を汲んでの判断でもありました。ただし、潜在的な感染者や日本国内・空港での移動など、リスクがまったくなかったとは言い切れません。この判断については、賛否が分かれるところですが、本学保健室より感染防止対策の指導を受けるなど、対策を徹底した上で実施いたしました。幸い、渡航者6名は感染に至らず、研修は問題なく遂行できました。研修実施に当たり、学内外の多くの関係者の皆様に深いご理解と多大なご協力を賜りましたことに、厚く御礼申し上げます。

付録

2019年度「学生研究発表大会」本選での発表資料

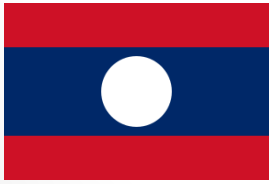
（桃山学院大学：2020年1月11日）

◯桃大公式 You Tube チャンネル：2019 年度「学生研究発表大会」学長賞チームの発表
https://www.youtube.com/watch?v=tZ2UA70R8sc （26～28 ページ参照）

ラオスの開発のために何が必要か

ー日本のODAのあり方を中心にー

（2020年1月11日：桃山学院大学・学生研究発表大会・本選）



＜内山ゼミ4回生（経済学部）＞
16e1020　伊藤 和輝
16e1024　猪俣 遼一
16e1299　高井 寿彦
16e1304　武田　望

1

1

目次

はじめに　なぜラオスに着目するか
1．ラオスの経済状況
2．日本の対ラオスODAの経緯と実績
3．これから求められるODAとは
4．ラオスの初等教育における問題点と対策
まとめ　私たちの提言

2

2

はじめに　なぜラオスに着目するか？

【ラオスとは】

国名　ラオス人民民主共和国

人口　約706万人(2018年、IMF統計) ➡兵庫県ほど

面積　23万6,800㎢(その内70%が山岳地帯)
➡日本の本州とほぼ同じ

特徴

- 国連の分類で最貧国（後発開発途上国）
- 内戦（1953～75年）や計画経済の下、低開発
- 人民革命党による一党独裁（1975年に王政廃止）

➡ 東南アジアに位置する最貧国

出典　外務省
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html

3

3

はじめに　なぜラオスに着目するか？

ASEAN経済統合による競争激化	• ASEAN（東南アジア諸国連合）10カ国は、2015年末に域内関税を概ね撤廃。 • 最貧国でありながら、域内貿易の自由化により激しい競争にさらされることになる。
ラオスの開発条件の不利性	• 内陸国である。　⇒　海・港がないため、輸出や外資導入に不利。 • 国土の7~8割は山岳地帯が占める。 • 人口密度が低い、人口集積地が少ない。　⇒　労働者の確保や市場規模に難がある。
日本との関係性	• 日本は対ラオス最大の援助国。 • 日系企業の進出数は150~200社程度と言われる。 • 日系企業の次なる投資先として有望視される。 • ⇒ラオスはともに発展するパートナー！

➡以上の3点から、ゼミの研究対象であるASEAN10カ国のうち、ラオスに焦点を当て、何が開発のために必要であるかを考察する！

4

4

1．ラオスの経済状況

【主要な経済指標（2018年：IMF統計）】
名目GDP：　181.2億ドル
一人あたりGDP：　2,565ドル（190カ国中136位）
年平均GDP成長率（2010－2017）：　7.57%

【国連ミレニアム開発目標（MDGs）の代表的指標】
1日1.25ドル未満で生活する人々の割合：55.7%（1992年）→　30.3%（2012年）
初等教育における純就学率：64.9%（1990年）→　97.3%（2013年）
（＊専門家へのヒアリングから数字ほど、改善されているわけではないと思われる）
5歳未満児の死亡数（1000人あたり）：162.0人（1990年）→　71.4人（2013年）
妊産婦の死亡数（出生児10万人あたり）：905人（1990年）→　197人（2015年）

※外務省HP、「政府開発援助（ODA）国別データ集（2016年版）」48~51ページ。

➡高い成長率を維持し、貧困率は下がってきているものの、
最貧国（後発開発途上国）から脱却できていない。

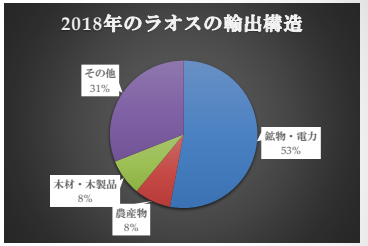
5

5

1．ラオスの経済状況

【経済を支える二本柱】
・鉱物資源（銅や金）と電力（水力発電）

【経済的脆弱性】
・鉱物資源は永久的ではない。
・水力発電は環境問題を抱える。
・農業従事者が人口の6~7割。
・製造業は労働集約的産業が主流。
・タイプラスワン型の投資は低付加価値の工程。



※JETRO サイトより作成

➡最貧国で経済的脆弱性を抱えるラオスに対し、
日本政府はODAでどのような支援をすべきか？

6

6

2．日本の対ラオスODAの経緯と実績

・日本のラオスに対する経済協力は、1958 年 10 月に行われた日・ラオス間の経済及び技術協力協定の署名に始まる。
・日本は対ラオス最大の援助国（2007年~2016年の10年間累計、全体の31%）。

	対ラオスODAの主なプロジェクト
1960年代	ナム・グム河開発基金協定
1970年代	ワッタイ空港滑走路延長工事、ビエンチャン上水道補修
1980年代	ナム・グム・ダム水力発電所補修計画、ビエンチャン都市交通網整備計画
1990年代	ナム・グム・ダム水力発電所補修計画、パクセー橋建設計画
2000年代	第2メコン国際橋架橋事業、メコン地域電力ネットワーク設備事業
2010年代	ワッタイ国際空港ターミナル拡張事業、国道16Bセコン橋建設計画

これまでのODAは、
交通インフラや電力インフラが中心

※外務省HP　ODA見える化サイトより作成

7

7

交通インフラへの支援

＜主要なODAプロジェクトを抜粋＞

空港の拡張工事
①【無償】ワッタイ国際空港滑走路延長工事（1969年）2.50億円
②【無償】ワッタイ国際空港滑走路延長工事（1970年）1.80億円
③【無償】ワッタイ国際空港高速離脱誘導路の建設等（1971年）3.60億円
⑤【無償】ワッタイ国際空港改修計画（1995年）44.64億円
⑨【有償】ワッタイ国際空港ターミナル拡張事業（2014年）90.17億円

道路の建設・改修
⑨【無償】ビエンチャン1号線（2005年7月）46.45億円
⑪【無償】国道9号線整備計画（2011年8月）32.73億円

橋梁の建設・改修
④【無償】国道13号線橋梁改修計画（1994年）15.79億円
⑥【無償】パクセー橋建設計画（1997年5月）54.46億円
⑦【無償】第2次国道13号線橋梁改修計画（1997年11月）76.49 億円
⑧【有償】第2メコン国際橋架橋事業（2001年12月）40.11億円
⑩【無償】ヒンフープ橋建設計画（2007年5月）9.3 億円
⑫【無償】国道16Bセコン橋建設計画（2014年5月）21.97 億円
⑬【無償】国道9号線橋梁改修計画（2016年7月）25.28 億円

※外務省HP、国別援助実績（各年版）より作成

8

8

交通インフラへの支援

パクセー橋（2000年開通）

パクセー橋の記念プレート

現地呼称は”Lao-Nippon Bridge”
日本とラオスの友好の証。
1万キープ紙幣に描かれる。

第2メコン橋（2006年12月開通）

ビエンチャン1号線

ワッタイ空港内のODAを紹介する看板

9

電力インフラへの支援

ナム・グム第一発電所全景

首都ビエンチャンのみならず、隣国へ電力輸出される規模を持つナムグムダムは1960年代から日本の無償・有償支援で建設・補修されてきた。

整備された水車発電機（1号機）

整備された主要変圧器（1号機）

11

電力インフラへの支援

＜主要なODAプロジェクトを抜粋＞

水力発電や送電線に関わる事業

①【無償】ナム・グム河開発基金協定（1969年）17.86億円
②【有償】ナム・グム・ダム水力発電事業（1974年）31.80億円
③【有償】ナム・グム・ダム水力発電事業（1976年）20.10億円
④【無償】ダム建設用資材（1978年）1.00億円
⑤【無償】ナム・グム・ダム水力発電所補修計画（1980年）5.50億円
⑥【無償】変電所補修計画（1984年）11.53億円
⑦【無償】ナム・グム・ダム水力発電所補修計画（1989年）8.83億円
⑧【無償】国際通信設備整備計画（1994年）11.22億円
⑨【無償】ナムグム第一発電補修計画（2002年~2004年）12.04億円
⑩【有償】メコン地域電力ネットワーク整備計画（2004年）33.26億円
⑪【有償】南部地域電力系統整備計画（2011年）41.73億円
⑫【無償】小水力発電計画（2012年）17.75億円
⑬【有償】ナムグム第一発電所拡張計画（2013年）55.45億円

※外務省HP、国別援助実績（各年版）より作成

10

2．日本の対ラオスODAの経緯と実績

【分野】	【内容】	【成果】	【私たちの評価】
交通インフラ	国際空港の整備・拡張 国内主要道路の建設 メコン川・支流への架橋	国内の流通や隣国・諸外国へのアクセス改善	◎
電力インフラ	ナム・グム・ダムの建設 水力発電所の建設 送電線の設置	電力は貴重な外貨獲得源に 東南アジアのバッテリーと評される	◎

➡ ラオスの経済発展を下支え。
2000年代半ば以降の日系企業の進出を促進。

12

3．これから求められるODAとは

	ラオスの状況	日本のODA
【1970年代~80年代】	内戦から計画経済体制での停滞	ナム・グム・ダム建設 ワッタイ国際空港の拡張・整備
【1990年代~00年代】	インドシナ和平・市場経済化 経済特区の整備（外資導入の準備）	主要な国道の整備・拡張 メコン川および支流への架橋
【2010年代】（近年）	ASEAN経済共同体の創設 外資導入（労働集約的産業）	経済・社会インフラ建設継続 人材育成や水環境改善、不発弾処理に協力
【今後】	鉱物資源・電力依存からの克服 経済を牽引する製造業の育成	人材育成への協力を強化すべき
【将来】	経済的自立	ODAの必要なし

13

3．これから求められるODAとは

【分野】 【内容】 【成果】 【私たちの評価】

人材育成（教育支援） → 教育用機材の提供
小学校の建設
人材育成機関の設置 → ハード面の充実
高等教育支援
日系企業との連携に貢献 △

【なぜ評価が△か】
➡学校建設などのハード面や高等教育への支援は効果的だが、教員の質向上などのソフト面、初等教育の支援に課題あり。

15

人材育成ための支援

＜主要なODAプロジェクトを抜粋＞

教育用機材の提供
①【無償】首都小中学校用謄写機材（1975年）0.14億円
②【無償】文部省体育教育振興用体操器械等（1979年）1.34億円
③【無償】文部省音楽機材（1981年）0.30億円
④【無償】文部省理科実験機材（1982年）0.30億円
⑤【無償】ビエンチャン教育大学実験機材（1986年）0.28億円

高等学校の改善
①【無償】高等電子技術学校改善計画（1993年）6.39億円

人材育成機関の設置
①【無償】日本ラオス人材協力センター建設計画（2000年）7.83億円・・・ラオス国立大学内に設置

小中学校の建設
①【無償】草の根無償（2000年~2002年）4.30億円
②【無償】小学校建設計画（2003年）3.33億円
③【無償】草の根・人間の安全保障無償（2003年から毎年実施）
④【無償】小学校建設計画（2004年）4.25億円
⑤【無償】南部三県学校環境改善計画（2008年）6.85億円

人材育成奨学計画
①【無償】人材育成奨学計画（1999年から毎年実施）

※外務省HP、国別援助実績（各年版）より作成

14

3．これから求められるODAとは

【日本政府が掲げる対ラオスODAの4つの重点分野】

- 経済・社会インフラ整備
- 教育環境の整備と人材育成
- 農業の発展と森林の保全
- 保健医療サービスの改善

【教育環境の整備と人材育成】

理数科教育分野を中心に初等及び中等教育の支援を行う。
また、民間経済セクターの強化促進のための高等教育・技術職業教育への支援も実施する。

※外務省HPより引用

➡はたして、これでよいのだろうか？ラオスの教育事情に詳しいお二方へのヒアリング調査をもとに、検討する。

16

4．ラオスの初等教育における問題点と対策

【ヒアリング調査に協力くださったお二方】

沢田誠二氏	• 京都教育大学名誉教授、JICA個別派遣専門家→ラオス教育省（2003年～2003年） • ラオス政府認可のNGO団体DEFCを立ち上げ、今日まで教育支援を続ける。
パチャベン・ティッパポーン氏 ニックネーム “ナムさん”	• ラオス・ビエンチャン出身の桃大卒業生・内山ゼミ先輩（2017年、2018年在籍） • （日本の）国費留学生

沢田誠二先生（2019年11月4日）

ナムさん（2019年12月26日）

17

17

4．ラオスの初等教育における問題点と対策

【ヒアリングから浮かび上がった課題】

この2点の改善を検討

教材の質	• 教科書に誤りが多い。 • 教員養成の指導書のレベルが低い。
教員の質	• ２年間の教員養成学校に通うだけで小学校教諭になることができる。 • 教科書の誤りを指摘、訂正できない場合がある。 • 教科書で学習するよう指示を出し、解説しない場合がある。
家庭事情	• 農村では農繁期に子どもたちも農業に従事　→　授業を長期間欠席 • 年に一度の進級試験に合格できず、留年や中退につながる。
地域間格差	• 首都とその他地域の格差が大きい。 • 奨学金の申請は首都でしか申し込みできない。 • 首都の学校は比較的新しい教材を使えるが、地方は使い古しが多い。 • 地方の中学校では下宿する学生達の生活環境が劣悪。
その他	• 少数民族がラオス語での教育についていけない。 • 国語では音読しない、音楽の授業がない場合がある。

18

18

①教科書・指導書の改善について

問題点①
• 教科書の表記などに間違いがある
→　教員は教育レベルが低いため、その教科書通り授業を行う

問題点②
• 教員の指導書のレベルが低い（指導書がない場合さえある）
→　授業の構成内容が一定でなく、指導レベルに差がある

改善策
• 教科書および指導書の開発を支援するプロジェクトが求められる

19

19

対ミャンマーODA　初等教育カリキュラム改訂プロジェクト

【ミャンマーを参考にする理由】
・ラオスと経済発展段階が近い

【対ミャンマー教育支援の事例】
教科書、指導書の開発に技術協力をすることによって
新しいカリキュラムフレームワークを構築する。
全国的に適用されることを最終目標に置いている。

授業研究での教員の意見交換の様子

【成果】
・新しい教科書及び教師用指導書の開発
・新しい学習評価ツールの開発
・新カリキュラムに基づいた教員養成課程の設備
・学校教員が新カリキュラムを理解するための活動の導入

※外務省HP　ODA見える化サイトより作成

20

20

②教員に対する教育支援

問題点①
- 教員養成学校の２年間の課程で小学校教諭になることができる（短期間で修得できる点など、教員養成カリキュラム自体の問題）

問題点②
- 現職教員研修に関する体系だった政策が資格付与研修以外はない

改善策
- **既存の現職教員研修システムの研修・能力強化**
- **教員のモチベーションを刺激**

21

21

対ベトナムODA　現職教員研修改善プロジェクト

【ベトナムを参考にする理由】
ラオスの一歩先を行く国の事例であるため

【対ベトナム教育支援の事例】
児童中心型教育導入を支援するプロジェクトで
暗記・講義中心の授業からの転換に伴う教員への研修
併せて学校管理職のマネジメント能力向上研修を実施

パイロット校における専門職会合

【成果】
- 新教授法研修マニュアル
  →教員が新教授法に関する概念の理解に適切で有用
- 先進的な事例を取り入れるため、非パイロット校の教員がパイロット校（バグザン省）の専門職会合を自発的に参観

※外務省HP　ODA見える化サイトより作成

22

22

4．ラオスの初等教育における問題点と対策

【初等教育（ソフト面）の教育支援がラオスの発展に結びつくプロセス】

①教科書・指導書の改善
授業内容の改善、安定性確保

②教員に対する教育支援
児童中心型教育の導入への支援

教育のレベルを上げ、学習環境を改善
進学率を向上させ 個人の能率化を図る

指導環境を改善し、教育の効率化を図る

高等教育に適応できる人材を増やす
個人の供給する付加価値を向上させる

23

23

まとめ　私たちの提言

ラオスの特徴・現状
- 東南アジアに位置する**最貧国**
- 内陸国、山岳地帯、人口密度が低いという**発展に不利な側面がある**
- ASEAN経済統合により、**窮地に立たされる恐れがある。**

日本はラオスに対して…
- 交通インフラ、電力インフラへの支援を重点的に実施。
- **教育支援はハード面、高等教育を中心に実施。**
- **→これからはソフト面、初等教育への支援を重視していく必要がある！**

将来的に経済的自立を果たすことが求められている

24

24

まとめ　私たちの提言

ラオスの開発のために・・・

高付加価値を供給する人材開発

↓

日本のODA支援のあり方として・・・

初等教育を充実させ、将来的に優秀な人材の層を厚くする

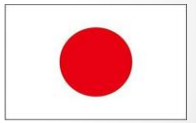
↓

教育支援がラオスの持続的成長の鍵を握る！！

25

25

~ご清聴ありがとうございました~



26

26

【参考資料】

- JBIC（国際協力銀行）（2014年）『ラオス投資環境』。
- 外務省（2018年版）『開発協力白書（ODA白書）』。
- IMF, *World Economic Outlook Databases*, October 2019.
- 外務省
  https://www.mofa.go.jp/mofaj/
- ODA見える化サイト
  https://www.jica.go.jp/oda/
- JETRO（日本貿易振興機構）
  https://www.jetro.go.jp/
- EXPAT
  https://courrier.jp/expat/area/laos/pakse/49/3113/
- 日本アセアンセンター
  https://www.asean.or.jp/ja/
- IMF（国際通貨基金）
  https://www.imf.org/external/japanese/index.html

27

【内山ゼミ紹介】ゼミ活動の様子

私たちのゼミは「アジア経済論」を専門とする内山怜和先生のゼミです。
ASEAN（東南アジア諸国連合）諸国を学修対象とし、学んでいます。

＜主な研究テーマ＞
- 東南アジアの経済問題や周辺情勢
- 各国の経済状況：近現代史や近年の経済概況、投資環境、経済発展戦略
- 日本との関係性：日系企業の進出動向、日本政府の経済援助

私たち1人1人が担当の国（ASEANの1カ国）を持ち、その専門性を高められるよう心がけています。

実際のゼミ活動の様子

内山ゼミ３期生の集合写真

28

28

【内山ゼミ紹介】「東南アジアのすゝめ」（2017年～）

2017年度から毎年、桃山祭において「東南アジアのすゝめ」と題する展示会を開催しており、2019年度の大学祭で三回目を迎えました。この展示会では桃大生をはじめ、地域の方々や子どもたちに東南アジアの国々の魅力を知ってもらおうとの思いで、実施しています。各国の紹介資料、民族衣装の展示、クイズ大会などの催しを行い、多くの方からご好評をいただきました。

展示会の様子

展示会の集合写真

2展示会で開いたクイズ大会

29

【内山ゼミ紹介】ラオス教育支援のための募金活動（2017年～）

私たちは「東南アジアのすゝめ」の一環で募金活動を行っています。

2018年11月の展示会では2万7410円が集まり、
特定非営利活動法人DEFC（ラオス政府認定のNGO）様のご協力でラオス僻村の小中学校や高校に学用品（文房具や教材、運動具）を提供することに成功しました。

実際に提供した物品

ナムガー中学校の寮生たち

私たちゼミ生が一丸となって展示会を成功させよう、来場者にラオスのことを知ってもらおうと活動してきたことは、とても貴重な経験となりました。このときの一生懸命な思いは今でも心に残っています。

30

30

【内山ゼミ紹介】ラオス教育支援計画（2020年3月2日～7日）

2019年11月の「第3回 東南アジアのすゝめ」でのラオス教育支援のための募金活動では、皆様のご協力により、3万995円が集まりました。今回は、私たちが直接現地に赴き、日本の紹介や日本語教室、サッカー教室の実施、学用品やスポーツ用品の提供を検討しています。その他、JICA事務所や教員養成学校への訪問を計画中です。

＊ サッカー教室は高校時代全国大会に出場歴のあるメンバー（3回生）がいるからです。

31

31

【内山ゼミ紹介】ラオス教育支援計画（2020年3月2日～7日）

≪日程≫
～1日目～
・関西空港　→　ハノイ・ノイバイ空港　→ビエンチャン・ワッタイ空港
～2日目～
・JICAラオス事務所訪問（ODAについて学習）、農業省表敬訪問
・首都ビエンチャン市内視察（凱旋門・パトゥーサイ、タート・ルアン寺院等）
～3日目～
・ビエンチャン市内の小・中学校を訪問
（学用品の提供、本学や大阪の紹介、日本語の授業、サッカー教室等を検討）
～4日目～
・教員養成学校訪問
・ラオス国立大学内日本ラオスセンター訪問
～5日目～
・JETROビエンチャン事務所訪問（ラオス経済についての学習）
・ビエンチャン・ワッタイ空港　→　ハノイ・ノイバイ空港　→　関西空港

以上を計画中です。

32

32

〔写真〕内山ゼミ3期生、卒業証書・学位記授与式にて（2020年3月17日）

ラオス教育支援と開発研究 ～2019年度ラオス研修報告書～

2021年3月11日 発行

編 著 者：内山 怜和
著　　者：伊藤 和輝・猪俣 遼一・高井 寿彦・武田　望・小坪 唯人
発　　行：桃山学院大学経済学部・内山ゼミ
E-mail： uchiyama@andrew.ac.jp
住　　所：〒594－1198　大阪府和泉市まなび野1－1 桃山学院大学・内山研究室
桃山学院大学・ホームページ：https://www.andrew.ac.jp/
MOMOYAMA GAKUIN UNIVERSITY / URL：https://www.andrew.ac.jp/english/

ラオス人民民主共和国は優しい国民性と豊富な自然資源が特徴の魅力あふれる国です。しかし、1975 年まで長く内戦状態にあり、今なお国連によってLDC（後発開発途上国）に位置づけられています。同国に対し、日本政府はこれまで電源開発や交通インフラの建設・整備などの協力をしてきました。今後、どのような開発協力が求められるかは内山ゼミの主要な研究テーマです。研究と並行して、東南アジア諸国の魅力を伝える展示会「東南アジアのすゝめ」（於桃山祭）を開催したり、ラオス教育支援（小・中学校、高校への学用品の贈呈など）を展開しています。一連の活動をこの報告書にまとめましたので、ぜひご覧ください。

ナムさんがムアンバテョン小学校を訪問、支援物資を贈呈

ムアンバテョン小学校の子どもたち

ラオス農林省農業局を訪問、農業開発についてヒアリング

ドンカムサン教員養成校・附属小学校を視察

JICAラオス事務所を訪問、日本の対ラオスODAについて学修

JETROビエンチャン事務所を訪問、経済事情について学修

世界が変わる体験がある。
桃山学院大学
Momoyama Gakuin University